

修士学位申請論文

「日本語教育への応用に向けた借用語適応に関する研究」

学修番号 13865102

首都大学東京大学院 人文科学研究科 人間科学専攻 日本語教育学教室

博士前期課程 2 年 渡辺 真由子

第1章 はじめに.....	4
第2章 研究の概要.....	5
2.1 本研究の背景と目的.....	5
2.2 本研究の構成.....	5
2.3 用語の定義.....	6
2.3.1 本稿における「外来語」および「英語借用語」の定義.....	6
2.3.2 本稿における「借用語適応」の定義.....	6
第3章 先行研究における借用語.....	8
3.1 促音化.....	8
3.2 母音・子音の置き換え.....	9
3.2.1 母音.....	9
3.2.2 子音・半母音.....	10
3.2.3 あいまい母音 [ə].....	14
3.3 開音節化.....	15
3.4 長音添加.....	15
3.4 外来語の通時的変化.....	16
第4章 日本語に取り入れられた英語における借用語適応.....	17
4.1 研究の概要と方法.....	17
4.2 結果と考察.....	18
4.2.1 単音節語.....	18
4.2.2 二音節語.....	19
4.2.2 二音節語における借用語適応の例外.....	22
4.2.3 三音節以上の語.....	23
4.3 日本語教育への応用.....	25
第5章 インドネシア人学習者における借用語適応.....	27
5.1 研究の目的.....	27
5.2 インドネシア語における借用語の位置づけ.....	27
5.2.1 インドネシア語の借用語.....	27
5.2.2 インドネシア語の音韻体系.....	28
5.3 調査の概要.....	29
5.4 結果と考察.....	30
5.4.1 借用語適応による音韻変化が少ない場合.....	30
5.4.2 オランダ語の影響.....	30
5.4.3 インドネシア語の音韻体系による影響.....	32
5.4.4 日本語とインドネシア語では対応する音韻が異なる語の場合.....	32
5.5 まとめ.....	33

第6章 コーパス調査に基づく外来語表記のゆれ.....	35
6.1 調査の背景と目的.....	35
6.2 調査の概要.....	35
6.2.1 調査の方法.....	35
6.2.2 調査対象語.....	36
6.3 外来語表記の基準と慣用.....	36
6.4 長音が含まれている語の場合.....	37
6.4.1 「lady」にみられる表記のゆれ.....	38
6.4.2 「carrier」にみられる表記のゆれ.....	38
6.4.3 「fast」にみられる表記のゆれ.....	39
6.5 原音に二重母音がある語の場合.....	40
6.5.1 「bowl」にみられる表記のゆれ.....	40
6.5.2 「made」にみられる表記のゆれ.....	41
6.6 原音に[wi]が含まれている場合.....	41
6.6.1 「week」にみられる表記のゆれ.....	42
6.6.2 「sweet」にみられる表記のゆれ.....	43
6.7 まとめ.....	44
第7章 結論と今後の課題.....	46
謝辞.....	47
参考文献一覧.....	48

第1章 はじめに

「外来語の氾濫」ということばが叫ばれて久しい今日、外来語が今以上に増えることを好ましくないと考える日本国民が過半数を占め¹、やたらと外来語で言い換えてしまう風潮を危惧する声も多い。このような風潮に危機感や不安を覚えるという意味においては、日本語母語話者（以下、母語話者とする）だけではなく、非日本語母語話者（以下、非母語話者とする）も同様である。日本語教育における外来語の扱いは消極的で、現状では学習項目として提出された外来語を読み書きできればいいという指導に留まっている。

そのため、学習者からは「英語を日本語に変換する規則がわからない」、「教科書に出てきた外来語はわかるけれど、初めて聞く外来語は書けないし、意味も連想できない」という声をよく聞く。以下は筆者が日本語運用能力の極めて高い非母語話者から受け取ったメールおよび文書の一例である。

- (1) *コンフィルムしてくださってありがとうございます。[インドネシア語母語話者]
- (2) *ボナースの支給日に関して再検討していただきたく… [中国語母語話者]

上記(1)、(2)の下線部はそれぞれ、「確認、承認」を意味する“confirm”と「賞与、特別手当」を意味する“bonus”を外来語としてカタカナ表記した際の誤表記である。全体的な日本語運用能力の高さに比べ、母語話者には何ら問題のない外来語の表記も、非母語話者にとっては決して容易ではないということがわかる。

陣内（2008）が日本語教育機関に在籍する日本語学習者（以下、学習者とする）を対象に行ったアンケート調査で「日常生活の中でカタカナ語がわからなくて困ったことはどれくらいありますか」という質問に「ある」「よくある」「ときどきある」と回答した学習者は合わせて 77.8%であったが、さらに日本語能力が高いと考えられる国内の大学学部留学生を対象に行った金城（2004）のアンケート調査で「片仮名語に対する苦手意識がある」と答えた回答者は 80%を超えており、日本語能力の向上にともなって外来語に対する苦手意識が変化するとは言い切れない結果となっている。

このように、習得が進んでも学習者が持ちつづける外来語への苦手意識や否定的態度は、日本語学習の初期段階において、ただ読んで書いて覚えることを要求され、英語が日本語に取り入れられる際の音韻変化を規則として習得していないことが大きな要因であると考えられる。未知の外来語にも対応できる規則を習得することによって、学習者がより前向きな姿勢で外来語と向き合えるようになることが、本研究が最終的に目指すところである。

¹ 国立国語研究所が行った「外来語に関する意識調査（平成 15 年調査）」の結果による。

第2章 研究の概要

2.1 本研究の背景と目的

本研究の目的は、現状の日本語教育では、単に読んで書いて覚えることが要求されている外来語習得に、より効果的で建設的な指導方法を示すことである。

英語は日本語に取り入れられると、日本語の音韻体系に合わせてその形が変化するが、この変化には規則性もあれば、例外も非常に多く存在する。また、つづり字、強勢、リズム、モーラなど実にさまざまな要因が絡み合っていることから、これまで音声学や英語学においても多くの研究が行われてきた。しかしながら、そういった研究の成果が日本語教育において積極的に取り入れられることはなく、英語と日本語の音韻がどのように対応しているかといったことを学ぶためのテキスト等もほとんど出版されていない。

個人的な経験談ではあるが、筆者の知り合いに、日本語運用能力が極めて高い非母語話者の女性があり、ある時彼女に「“キャッスル” とは何のことか」と尋ねられた。そして英語の“castle”が原語であることを伝え、「日本に来て20年以上経つが、まさか“キャッスル”が“castle”のことだったとは」と非常に驚いていた。母語話者である筆者にとっては「当たり前すぎて」質問の意図すら計りかねる疑問だったのだが、このエピソードこそがまさに「英語由来なのだからわかって当然である」という母語話者と「英語から日本語に変わる過程で一体どのような変化が起きているのかが見当もつかない」という非母語話者の間に立ちはだかる意識の差を物語っていると言えるだろう。

そこで本研究では、英語が日本語に取り入れられる際の音韻変化を学習者にわかりやすく示すことを目的とし、辞書を利用した語彙調査、学習者による表記、コーパスから見た表記のゆれという3つの観点から考察し、日本語教育にどう応用すべきかを探る。

2.2 本研究の構成

本研究は7章で構成されている。

第1章は「はじめに」として、学習者にとっての外来語習得の現状と本研究の意義について述べる。

第2章は、本研究の背景と目的について述べ、「外来語」と「借用語適応」の定義を整理する。

第3章は、促音挿入、開音節化、母音添加の通時的変化など借用語適応に関するこれまでの先行研究を整理し、問題点を明らかにする。

第4章は、「日本語に取り入れられた英語における借用語適応」について考察する。英語由来の外来語を国語辞典より2347語抽出し、日本語に取り入れられた際に起こった音韻

変化の傾向や特徴を音節別に探る。また、この調査と分析をもとに、日本語教育においてどのような指導が効果的であるかについて考察する。

第5章は、「非母語話者における借用語適応」についての調査である。これまでの研究で述べられてきた母語別の学習者による外来語の書き取り調査を概観した上で、インドネシア人学習者の表記の誤りからインドネシア語の音韻体系がどのように影響を及ぼすのか、また母語の異なる学習者に共通する表記の誤りがあるのかについて考察する。

第6章は、「表記のゆれに関するコーパス」調査である。二重母音「エイ／エー」や「ウイ／ウイ」のような表記のゆれにこれまで研究されてきた経年変化や世代差の他にどのような要因があるのかを検討する。また、外来語の表記が今後どのように変化していくかについてもその可能性を示唆する。

第7章は、本論文で扱った辞書による外来語の語彙調査、インドネシア人学習者を対象とした外来語の書き取り調査、コーパスを使った表記のゆれに関する調査をまとめ、日本語教育に応用するという点から考察し、本研究のまとめと今後の課題について述べる。

2.3 用語の定義

2.3.1 本稿における「外来語」および「英語借用語」の定義

『現代言語学辞典』（亀井他 1995）では、外来語を「主として欧米諸言語から日本語に入ってきた語」と定義している。これによると、借用語には漢語も含まれるのに対し、外来語は欧米諸言語から輸入されカタカナで表記される外国語由来の語彙を指すという。本研究では、欧米諸語から日本語に入ってきた語全体を「外来語」とし、英語由来の外来語のみを特に指す場合には「英語借用語」と呼ぶこととする。

なお、成田（2009）によれば、現代英語 2 万語を大まかに分類すると、英語本来語が約 20%であるのに対し、ラテン・フランス語系が約 50%、ギリシア語系が約 13%、北欧語系が約 7%であるという。そのため、本研究で英語由来として扱う語には、本来の意味においてラテン・フランス語由来やギリシア語由来である語が多く存在するが、現代フランス語や現代ドイツ語から輸入された語と区別し、これらも「英語借用語」として取り扱う。

2.3.2 本稿における「借用語適応」の定義

外国語の語彙が日本語に取り入れる際、日本語の音韻体系に合わせてその形が変化することを、国立国語研究所（1990）、楳垣（1963）、小林・カッケンブッシュ・深田（1991）、石綿（2001）等では「日本語化」と呼んでいる。「日本語化」には音韻面の変化のみならず、以下のような変化や現象も含まれていることが多い。

- ・形態面の変化（例：メモる、サボる）
- ・和製外来語（例：ボトルキープ、ホームドラマ）
- ・外来語に和語・漢語が組み合わさった混種語（例：生ビール、家庭サービス）

本研究では、このうち音韻面の変化のみを取り扱うため、大滝（2013）にならい、借用語を取り入れる過程とそれによる音韻変化を「借用語適応」と呼ぶ。

第3章 先行研究における借用語

国立国語研究所(1990)、石綿(2001)では「借用語適応」には主に開音節化(母音添加)、促音化(促音挿入)、母音・子音の日本語化(日本語にはない音の置き換え)があると述べている。本章では、こうした音韻変化に関する先行研究を概観しながら、「借用語適応」の概要について説明する。

3.1 促音化

借用語の促音化は、「弛緩母音²・阻害音³という音連続を持っている場合に起こりやすく、先行母音が緊張母音の場合や二重母音の場合、共鳴音が後続する場合は起こらない」という点では、どの研究でも一致する見解である(窪菌・太田 2001、川越・荒井 2002、大滝 2013 他)。しかしながら、語中音節と語末の子音連続の前でこの規則を当てはめると、促音化を過剰に引き起こしてしまう問題点があり、韻律外音化(小野 1991)、リズムの衝突(川越 1995)、最適性理論(北原 1997)といった観点から促音化の生起要因を探る研究がされてきた。

川越(1995)では、アクセント辞典から英語借用語 2068 語を抽出し調査を行っている。その結果、mix [miks]のように語末に子音連続 C₁C₂(C₃)#がある場合、C₁のみならず C₂、C₃ もの有無に関与すること、語末の子音連続と語中子音では、母音が強勢を持つことが促音化の条件であるとし、その上で、いずれにおいても促音を引き起こす母音が音節核にあることが条件であると述べている。また、原語の強勢が日本語のリズム衝突を引き起こし、促音生成に影響を及ぼすとしている。

丸田(2001)でも、語末子音連続 C₁C₂において C₁ と C₂ で分類し、C₁ で分類するとその一般化は困難となり C₂ が促音化の鍵となっているとし、さらに C₂ が無声破裂音/p/, /t/, /k/の場合は促音が表れず、/r/, /s/, /n/の場合には促音が表れる場合と表れない場合があるとしている。

大滝(2013)では、促音化する語には、語末音節の末尾子音で起こる「語末の促音化」と語中音節の子音で起こる「語中の促音化」というふたつの種類があり、このうち「語中の促音化」はつづり字という視覚的な要因が大きく関与した現象であると主張している。

以上のように、これまでの研究ではさまざまな理論や調査によって個別事例における音の生成要因を解明してきているが、強勢や音韻環境、つづり字などさまざまな要因が絡

² 舌の緊張の弱い状態で調音される母音を弛緩母音という。これに対し、舌が相対的に緊張した状態で調音される母音を緊張母音という。[i][u]が緊張母音であるのに対し、[ɪ][ʊ]は弛緩母音と言われる。緊張母音、弛緩母音はそれぞれ長母音、短母音とも言われる。なお、IPA では音長の長 (long) を表す記号として[:]を用いる。

³ 阻害音とは、破裂音、破擦音、摩擦音の総称である。阻害音に対し、母音や[n][m][r][l][j][w]は共鳴音と呼ばれる。

んでいることから、包括的に説明することは難しいようである。

3.2 母音・子音の置き換え

3.2.1 母音

竹内（2014）によれば、英語の母音数は、[i][ɪ][e][æ][ɑ][ʌ][ɔ][o][u][ʊ]をはじめとして、イギリス英語で弱母音を含め 30 個、アメリカ英語で 37 個あるという。日本語には[a]と[ɑ]の間である「ア」、[i]より広い「イ」、[u]に比べると唇の丸めが少ない「ウ」、[e]と[ɛ]の間である「エ」、[o]と[ɔ]の間で唇の丸めがやや弱い「オ」の 5 つである（斎藤 2007）。本稿では、便宜上の「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」の音声記号を[a][i][u][e][o]で表す⁴。

このような母音数の違いから、英語では意味を弁別する複数の音素が、日本語に取り入れられるとひとつの音素に統一されてしまい、英語では意味を弁別する個々の音素[a][æ][ʌ]が、日本語に取り入れられると[a]に統一されてしまう。

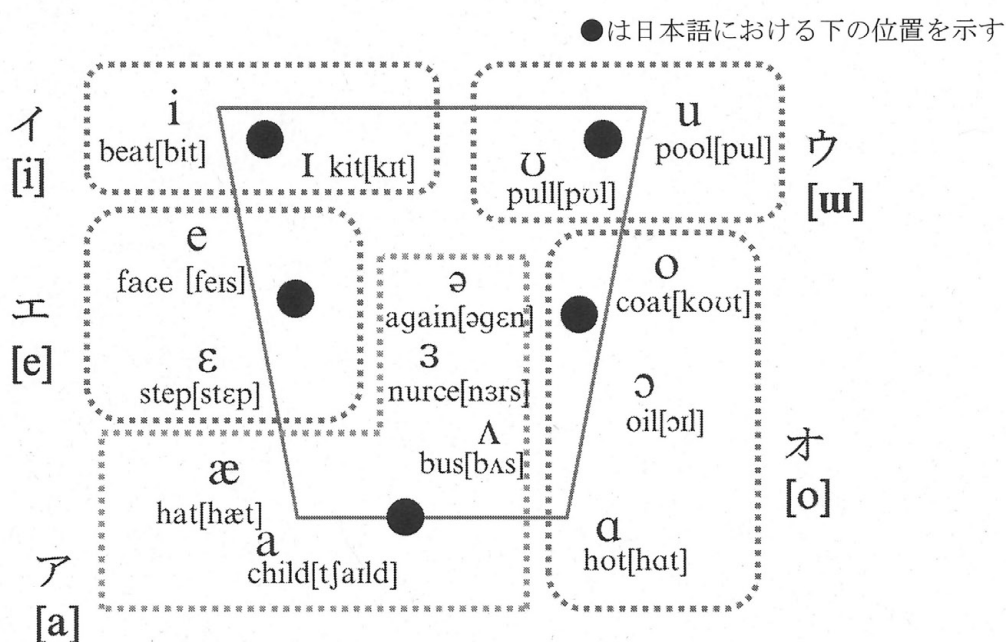


図1 英語母音と日本語母音の音韻対応
(斎藤 2007 より筆者が作成)

また、アメリカ英語とイギリス英語では音韻が異なる点がある。本稿では、便宜上、アメリカ英語に基づき *Cambridge Dictionary of American English* に記載されている音声記

⁴ 本稿では日本語の「ウ」を[u]で示しているが、『国際音声記号ガイドブック』（2003）では、日本語の「ウ」を「聴覚上[u]に似てはいるが、唇は半ば閉じられ、円唇性も張唇性も示さない。」と述べ、中條（1995）では「日本語の「ウ」は非円唇の[u]で、特に東日本がそうである。」としている。

号に基づいて論を進めるが、イギリス英語から日本語に取り入れられた語によっては、矛盾が生じる場合があるため、竹林(1996)、成田(2009)の記述もとに標準米国発音(General America, 以下 GA とする)と標準英国発音(Received Pronunciation, 以下 RP とする)の比較をもとにアメリカ英語とイギリス英語の違いを大まかに述べておく。

まず、借用語適応を経て、日本語の[a]もしくは[o]に変換される英語の音であるが、アメリカ英語とイギリス英語では複雑な対応関係が見られる。したがって、アメリカ英語を基準とすると、[a]という音が日本語に取り入れられ借用語適応を経て変換される場合、[a]と[o]の二通りの可能性が考えられる。成田によると、音素とつづり字の対応は、イギリス音の[p]⁵のつづり字は、95%が<o>であり、[ɑ:]のつづり字は、60%が<ar>、32%が<a>であるという。すなわち、アメリカ英語で[a]となる語はつづり字が<o>であれば、日本語では、ほぼ「オ」となり、<a>もしくは<ar>であれば日本語では「ア」となるということが言える。

また、アメリカ英語の特徴としては母音+rのつづりからなる「R 音性母音」がある。GA では bird, perfect, hurt の下線部に対応する音は[ə]として存在しているが、RP では R 音性が消失して単なる長母音[ɑ:]となっている。

表 1 イギリス英語とアメリカ英語 (WELLS 1982)

	RP	GA	keyword		RP	GA	keyword
1	ɪ	ɪ	KIT	13	ɔː	ɔ	THOUGHT
2	e	ɛ	DRESS	14	əʊ	o	GOAT
3	æ	æ	TRAP	15	uː	u	GOOSE
4	ɒ	ɑ	LOT	16	aɪ	aɪ	PRICE
5	ʌ	ʌ	STRUT	17	ɔɪ	ɔɪ	CHOICE
6	ʊ	ʊ	FOOT	18	aʊ	aʊ	MOUTH
7	ɑː	æ	BATH	19	ɪə	ɪr	NEAR
8	ɒ	ɔ	CLOTH'	20	ɛə	ɛr	SQUARE
9	ɜː	ɜr	NURSE	21	ɑː	ɑr	START
10	iː	i	FLEECE	22	ɔː	ɔr	NORTH
11	eɪ	eɪ	FACE	23	ɔː	or	FORCE
12	ɑː	ɑ	PALM	24	ʊə	ʊr	CURE

3.2.2 子音・半母音

⁵ [p]は辞書によっては[p]で表記されることが多いが、成田(2009)は、「音質の差を無視して/b/と/ɒ:/と区別せずに/ɒ/と表記しているのは、英和辞典の発音表記の大きな問題のひとつであるとして、英国で出版されているほとんどの辞書では英音は当然のことながら/b/で表記されていると指摘している。

子音や半母音では、表 2 および図 2 に見られるように日本語にない音が置き換えられたり、また類似した音に統合されたりという現象が見られる。

また、現代日本語ではワ行音は「ワ」のみであることから借用語適応においても、半母音[w]に[a]以外の母音が後続する場合は[w]の脱落が見られ、whip [hwɪp]のように[hw]という音連続の場合は、[h]に[o]が添加され、さらに[w]が脱落して「ホイップ」となる。

表 2 子音・半母音の借用語適応

置き換え	[f]→[ɸ]	flower /flaʊər/→フラワー /ɸurawɑː/
	[v]→[b]	video /vɪdɪoʊ/→ビデオ /bideo/
	[θ]→[s]	third /θɜːrd/→サード/saːdo/
	[ð]→[z]	mother /mʌðər/→マザー /mazaː/
	[j]→[i]	yellow /jeləʊ/→イエロー/ieroː/
	/hwV/→/hoV/	whistle/hwɪsl/→ホイッスル/hoissuru/
挿入	ɸ→[j]	earphones /ɪə ⁶ /→イヤホン/ija/
統合	[l] → [r] [ɹ]	lock[lak] →ロック[rokkɯ] rock[ɹak]
脱落	[w]→ɸ	wool /wʊl/→ウール/ɯːru/

			両唇	唇歯	歯	歯茎	歯茎 硬口蓋	硬口蓋	軟口蓋	声門
阻害音	破裂音	英	p	b		t / d			k / g	
		日								
	破擦音	英					tʃ / dʒ			
		日								
	摩擦音	英	ɸ	f	v	θ / ð	s / z	ʃ / z		h
		日								
共鳴音	鼻音	英	m			n			ŋ	
		日								
	側面音	英				l				
		日								
	接近音	英				ɹ		j	w	
		日								
	はじき音	英				r				
		日								

⁶ アメリカ英語では[ɪr]、イギリス英語では[ɪə]となる。

図 2 英語子音と日本語子音の音韻対応

表 3 は、日本語と英語の音韻対応の一覧である⁷。

表 3 日本語と英語の音韻対応一覧

	—	ʃ	g	s	z	θ
—		キャッ ^シ ュ	バッ ^グ	バス	グッ ^ズ	ス ^リ ル
ɑr	ア ^ー チ	シャ ^ー プ	ガ ^ー デン			
ʌ	ア ^ッ プ	シャ ^ッ ター	ガ ^ッ ツ	サ ^マ ー		サ ^ン ダー
æ	ア ^ッ プル	シャ ^ド ー	ギャ ^グ	サ ^ン ド		サ ^ン キュー
ɜr		シャ ^ツ	ガ ^ー ル	サ ^ー クル	デ ^ザ ー ^ト	サ ^ー モス
ai /aʊ	アイ ^ラ ンド	シャ ^ワ ー	ガウ ^ン	サウ ^ン ド		
i	イ ^ー グル	シー ^プ	バギ ^ー	シー	ゼ ^ロ	シンバ ^シ ー
ɪ	イ ^ン ク	シ ^フ ト	ギ ^フ ト	シル ^ク	ジ ^ッ プ	シ ^ア ター
u		シュー ^ズ	グ ^ー グル	ス ^ー プ	ズ ^ー ム	
ʊ		シュ ^ガ ー	グ ^ッ ズ			
ɛ	エ ^ッ グ	シェ ^ル ター	グ ^ス ト	セ ^ン ター		セ ^ラ ピー/テ ^ラ ピー
eɪ	エン ^ゼ ル	シェ ^イ ク	ゲ ^ー ム	セ ^ー ル		
ɑ	オリ ^ー ブ	ショ ^ッ ク	ゴ ^ー ルフ	ソ ^ッ クス	ゾ ^ン ビ	マ ^ラ ソ ^ン
ou	オ ^ー シャン	ショ ^ー	ゴ ^ー ルド	ソ ^ー ダ	ゾ ^ー ン	
ɔr /ɔɪ	オイ ^ル	ショ ^ー ト	ゴ ^ー ジャス	ソ ^ー ルト		メン ^ソ ール
	dʒ	t	d	tʃ	f	
—	バッ ^ジ	キャッ ^ト	ベッ ^ド	ビー ^チ	ビー ^フ	
ɑr	ジャ ^ー	アバ ^{ター}	ダー ^ツ	チャ ^ー ミング	ファ ^ザ ー	
ʌ	ジャ ^ン グル	バス ^タ ブ	アダ ^{ルト}	チャ ^ン ク	ファ ^ン	
æ	ジャ ^ズ	タ ^ッ プ	ダン ^ス	チャ ^ン ピオン	ファ ^ッ ッション	
ɜr	ジャ ^ー ナル	ター ^ミ ナル	ダー ^{ビー}	チャ ^ー チ	ファ ^ー スト	
ai /aʊ	ジャ ^イ アント	タウ ^ン	ダウ ^ン	チャ ^イ ルド	ファ ^イ ル	
i	ジ ^ー プ	ティ ^ー /チ ^ー ム	ディ ^ー プ	チ ^ー ク	フィ ^ー バー	
ɪ	ジ ^ン ジャー	ティ ^ッ シュ	ディ ^ス コ/クレ ^ジ ット	チ ^ッ プ	フィ ^ッ ト	

⁷ Longman Dictionary of Contemporary English 5th edition DVD-ROM 版の音声記号検索機能を用いた上で Cambridge Dictionary of American English によってアメリカ英語の音声記号と照合し筆者が作成したものである。なお、該当する音韻配列の英語借用語がない場合は空欄にし、人名にのみ該当語がある場合は、語例の右上に星印 (*) を付けた。

u	ジュース	ツール/チューター	ジュース/デュエット	チューイング	フード	
ʊ	ジュラシック	ツアー		アマチュア	フル	
ɛ	ジェル/ゼリー	テント	デスク	チェック	フェンス	
eɪ	ジェームズ*	テープ	デート	チェーン	フェイス	
ɑ	ジョブ	トップ	ドッキング	チョコレート	フォント	
oʊ	ジョーク	トーン	ドーム	チョーカー	フォーカス テレホン	
ɔr /ɔɪ	ジョージ*	トーク	ドア	チョーク	フォーマル プラットホーム	
	b	m	p	k	h	n
—	ウェブ	ジャム	マップ	クリック		コイン
ɑr	バー	スマート	スパ	カード	ハーフ	ナット
ʌ	バケツ	マフラー	パンチ	カスタード	ハスキー	ナプキン
æ	バンド	マット	パス	カメラ/キャンプ	ハット	ナイト
ɜr	バード	コマース	パーフェクト	カーブ	ハープ	ナース
aɪ /aʊ	バイブル	マウンテン	パウダー	カウント	ハイク	ポニー
i	ビーチ	ミート	ピーナッツ	キーブ	ヒーター	ニット
ɪ	ビッグ	ミックス	ピクニック	キス	ヒント	ヌード
u	ブース	ムード	プール	クール	フープ	ニューロン
ʊ	ブック		ブッシュ	クッキング	フック	ネット
ɛ	ベッド	メダル	ベット	ケトル	ヘッド	ネール
eɪ	ベイビー	メール	ペイント	ケーキ	ヘーゼル	ノック
ɑ	ボックス	モデル	ポケット	コテージ	ホット	ノート
oʊ	ボナス	モード	ボール	コート	ホーム	ノース
ɔr/ɔɪ	ボイラー	モラル	スポーツ	コイン	ホール	
ju	トリビュート	ミュージック	コンピュータ	キュービッド	ヒューマン	マニユアル
	v	l	ɪ	w	j	
—	バルブ	ボール				
ɑr		カモフラージュ				
ʌ		ラッキー	ラッシュ	ワン	ヤング	
æ	バルブ	クラス	ラケット	ワックス		
ɜr	バージョン	レーニング		ワールド		
aɪ /aʊ	バイオリン	ラウンジ	ライバル	ワイド		
i	ビーナス	リード	リーディング	ウィーク		
ɪ	ビデオ	リンク	リンス	ウィスキー/スイッチ	イヤヤー	

u		ル <u>ー</u> プ	ル <u>ー</u> フ		ユ <u>ー</u> ザー
ʊ		ル <u>ッ</u> クス	ル <u>ー</u> ム	ウ <u>ー</u> ル	ユ <u>ー</u> ロ
ɛ	ベ <u>ス</u> ト	レ <u>ン</u> ズ	レ <u>ギ</u> ュラー	ウ <u>エ</u> ット/ク <u>エ</u> スション	イ <u>エ</u> ロー
eɪ	ベ <u>ー</u> ル	レ <u>ー</u> ス	レ <u>ー</u> ル	ウ <u>エイ</u> ブ	
ɑ	ボ <u>ラ</u> ンティア	ロ <u>ッ</u> ジ	ロ <u>ッ</u> ク	ウ <u>オ</u> ッチ/ウ <u>オ</u> ッチ	ヨ <u>ッ</u> ト
oʊ	ボ <u>ー</u> カル	ロ <u>ー</u> カル	ロ <u>ー</u> ド	オ <u>ー</u> ブン	ヨ <u>ー</u> グルト
ɔr/ɔɪ	ボ <u>イ</u> ス	ロ <u>ー</u> スクール	ロ <u>イ</u> ヤル	ウ <u>ォ</u> ール/ク <u>ォ</u> ーツ/ワ <u>ー</u> プ	ヨ <u>ー</u> クシャー
ju	インタ <u>ビ</u> ュー				

3.2.3 あいまい母音 [ə]

中舌母音 [ə]はアクセントのない弱母音で、母音の中で一番出現率が高い音素である。舌の最高点は範囲が広く、元のつづり音の影響を受けることも多いので、音が「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」のどれにもあてはまらず、「あいまい母音」と呼ばれ（竹内 2014）、日本人には聞き取りにくい音のひとつであるため、「あいまい母音はスペルによって決まるということになる」（国立国語研究所 1990）。小林（2000）では、“support” のようにつづりが<u>であってても日本語では[a]に対応するケースに関しては、[ʌ]と[ə]の調音点が近いことから、[ʌ]と見なしているためであると説明している。

また、語末の音が/ər/となる語は、/ər/の前が母音であれば「ア」、子音であれば「ア列音+長音」で表される傾向が強い。

表 4 あいまい母音とつづりの関係

つづり	例	カナ表記		
i	stam <u>i</u> na /stəmənə/	/i/ スタ <u>ミ</u> ナ	/Cər/	
e	cam <u>e</u> ra /kæməɾə/	/e/ カ <u>メ</u> ラ	popular /pəpjələr/	ポ <u>プ</u> ュ <u>ラ</u> ー
a	cat <u>a</u> logue /kætəlog/	/a/ カ <u>タ</u> ログ	calender /kæləndər/	カ <u>レ</u> ン <u>ダ</u> ー
o	gor <u>o</u> lla /gənɾə/	/o/ ゴ <u>リ</u> ラ	/Vər/	
u	sup <u>u</u> port /səpɔrt/	/a/ サ <u>ポ</u> ート	career /kəriər/	キ <u>ャ</u> リ <u>ア</u>
	uran <u>u</u> m /jʊərəniəm/	/u/ ウラニ <u>ウ</u> ム	floor /flɔər/	フロ <u>ア</u>

しかしながら、3音節以上の語になると、あいまい母音の問題をつづり字のみでは解決できなくなってくる。以下に挙げるように文節音が変化した語においては、音韻派生の途中で母音弱化によって無強勢母音があいまい母音になるからである。

direct /dɪrɛkt / +/ ion / → direction /dɪrɛkʃən/

そのため、派生語や音韻変化が起きている語においては、/ə/が基底ではどの音であったかを考える必要がある。

表 5 派生語におけるあいまい母音と添加母音

派生形		基底形		添加母音
interpreter	/ɪntɜːprətər/	interpret	/ɪntɜːprɪt/	インタープ <u>リ</u> ター
conglomerate	/kɒŋɡləməɹət/	glomerate	/ɡləməɹɪt/	コングロマ <u>リ</u> ット
reasonable	/rɪzənəbəl/	reason	/rɪzn/	リー <u>ズ</u> ナブル

3.3 開音節化

閉音節構造である英語が、子音の連続を許さない開音節構造である日本語⁸に取り入れられると、語末子音の後ろや子音連続の間に母音が添加される。通常は語末子音には[u]が挿入されるが、[tʃ][dʒ]の後には[i]が添加され、[t][d]の後には[o]が添加される（国立国語研究所 1990）。cake[keɪk]がケーキ[ke:ki]となるような例外もあるが、このような母音添加の通時的な変化については、3.5 で述べる。

表 6 開音節化によって添加される母音

規則	語例
原則 ([p][b][k][g][s][z][θ][m]など) ⇒[u]を添加	rice/raɪs/→ライス/raɪ <u>su</u> /
語末の[t][d]⇒[o]を添加	date/deɪt/→デート/deɪ <u>to</u> / guide/gaɪd/→ガイド/gaɪ <u>do</u> /
語末の[tʃ][dʒ]⇒[i]を添加	lunch/lʌntʃ/→ランチ/raɪ <u>ntʃi</u> / page/peɪdʒ/→ページ/peɪ <u>dʒi</u> /

3.4 長音添加

二重母音[eɪ][oʊ]は、それぞれエ列長音、オ列長音となる傾向が強いが、ホテル[hɒtəl]、ホステス[hɒstəs]、ホルモン[hɒrmɒn]のように長音化されない例もある。

英語借用語の長音添加に関して扱った先行研究は管見の限り非常に僅かであり、借用語全体を述べるにあたって部分的に述べているにすぎない。

小林（2000）では、強勢があるかどうかによって長音添加の有無が決定されるとし、cocktail [kakteɪl]は[kak]の部分に強勢があるため、「カクテル」とはならないことに説明がつくとしているが、それでは先に述べた「ホステス」がなぜ「ホーステス」にならないのかの説明にはならない。また、国立国語研究所（1990）では以下のように日本語と英語の音韻対応を示しているものの、規則については明言しておらず、長音添加は、借用語適応の中でも特に原語の強勢やつづりとの関係が影響し、添加の有無が不安定で

⁸ 拗音（例：キャ[kja]など）は除く。

あると言える。

表 7 長音が添加される音韻

i: →i:	beat[bi:t]→ビート	ɔ: / ɔ:r→o:	ball[bɔ:l]→ボール
ei→e:	game[geɪm]→ゲーム	ou→o:	boat[bout]→ボート
a: / a:r→a:	bar[bair]→バー	u:→u:	boots[bu:ts]→ブーツ

(音声記号は国立国語研究所 1990 による)

3.4 外来語の通時的変化

日本語がヨーロッパ諸言語のことばを外来語として取り入れた歴史は古く、室町時代末期にキリシタン文化とともに運び込まれたポルトガル語の借用から始まり、享保以降は蘭学の興隆に伴いオランダ語からも借用されるようになった。そして幕末以降は英語やドイツ語、フランス語が輸入されるようになり、さらに第二次世界大戦後からは、特に英語から多く借入されるようになった(榎垣 1963、築島 1964、大江 1969、澤田 1985)。

「ストライク」「ストライキ」はいずれも英語の“strike”を借用した語であるが、これは前節で述べたように開音節化によって添加される母音に変化したためである。室町時代のキリシタン資料から語頭および語中に現れる子音連続は、後続の母音と同じ母音が添加されると指摘されている(土井 1933)が、江戸時代になると、[s][p][f]ではほとんどで[w]が添加されるようになり、語中の[k]は全体の 30%ほどが後続の母音に関係なく[w]が添加されるようになったという。一方で語末が/～ik/や/～eik /で終わる語については[w]ではなく[i]が添加されていたと指摘されている(澤田 1985)。このような[k]の開音節化における母音添加のゆれは、昭和期に入り[w]へ傾いてきたものの、慣用的に[ki]の形を保存しているものが共存する形となった(榎垣 1963、大江 1969)。この開音節化における添加母音の変化に関して井上(2002)では母音の方言差が働いた可能性を示唆し、近代以降東日本方言が外来語導入の主体になったために添加母音にウ段を使い始めたと推測している。

表 8 母音添加の通時的変化

室町	gabriel→が ^ひ りゑる padre→ぱあ ^で れ
江戸	[k] concreet→コン ^ク リート creosoot→ ^ケ レオソート [s] asbest→ア ^ス ベスト [p] knipmes→キニッ ^プ メス
明治	brake ブレー ^キ 、stick ステッ ^キ excite エ ^キ サイト
昭和	boxing ボ ^ク シング、index インデッ ^ク ス cake ケー ^キ shake シェー ^キ stake ステー ^キ

第4章 日本語に取り入れられた英語における借用語適応

4.1 研究の概要と方法

本章では、日本語教育において借用語適応を踏まえた外来語指導を行うことを目的とし、これまでの先行研究で個別に研究されてきた促音挿入や開音節化などを英語借用語全体の中で捉えた場合に、どのような傾向や規則が見られるのかについて検討する。竹林（1996）によれば、英語の基礎語彙約 6000 語のうち、単音節語と二音節語で全基礎語彙の 3 分の 2 を占め、話しことばの基礎的な約 3,000 語ではこの割合が 75.5%にもなるという。日本語に取り入れられた英語借用語にも同様の特徴があると考えられるため、単音節語と二音節語に焦点を当てて論を進めることにする。

分析対象語彙は『集英社国語辞典 第 3 版』で外来語として収録されている語⁹から表 1 に該当する語句を除外した 2347 語である。ここから音節ごとに分類し、*Cambridge Dictionary of American English*（以下、CDAE とする）に掲載されている音声記号をもとに、原語から日本語への借用語適応がどう適用されているかを検証した¹⁰。なお、調査対象語彙の音節ごとの総数は、単音節語 773 語（32.9%）、二音節語 942 語（40%）、三音節以上の語 632 語（27.1%）であり、竹林（1996）が述べた「基礎語彙の 3 分の 2 を二音節までの語が占める」という結果に合致していた。

表 1 分析対象からの除外項目

除外事由	語例
英語以外の言語由来であると明記されている場合	ソーダ(soda 蘭) ゼミナール(seminar 独)
原語が英語由来であることが明確にわからない人名、地名	スチーブンソン(Robert Louis Stevenson)
混種語で、外来語が単独では使用されていない場合	アーク灯 ハترون紙
頭文字略語	ロハス(LOHAS)
合成語は、個々の語が独立語として単独で掲載されている場合は個々に採用	ムーン・ライト(moonlight) ピン・ホール(pinhole)
商標名	アイモ(Aimo)、セスナ(Cessna)
短縮された和製英語で、本来の語では外	アクセル(accelerator)

⁹ 掲載語に複数の表記があるものは、内閣告示『外来語の表記』を参考とし、より一般的な形で掲げられている。

¹⁰ イギリス英語の音韻体系をもとに借用語適応が行われている場合もあり、その場合は *Longman Dictionary of Contemporary English 5th edition* の音声記号を参考にした。

来語として使用されていない場合	コンテ (<u>continuity</u>)
古い時代に取り入れられ、音韻変化が現代の規則から著しく外れている場合	アイロン (iron) ミシン (<u>machine</u>)
限られた場面や分野でのみ使用され一般的ではない専門用語	ギミック (gimmick) ※【映】特殊効果 ファラド (farad) ※【電】静電容量の単位
派生語、接頭辞、接尾辞 (・er, ・ism 等)	アーバニズム (urban <u>ism</u>) ディバイダー (divi <u>d</u> er)
CDAE に掲載されていない場合	ダイオキシン (dioxin) オットマン (ottoman)

4.2 結果と考察

4.2.1 単音節語

単音節語 773 語のうち、前章で述べた借用語適応の原則では正常に処理できない音韻変化が起きた語は 29 語 (3.7%) であった。言い換えれば、単音節語に関して言えば、95% 以上は通常の借用語適応規則が適用できるということである。

借用語適応の原則が適用できなかった語は、大きく分けて、①促音化の例外、②3 モーラ音節の忌避、③借用語適応規則の通時的変化、④つづり字の影響に分類することができる。

まず、促音化の例外に関しては、語末に子音連続がある場合と弛緩母音+[g]という音韻環境においては、必ずしも促音が挿入されないということが言える。語末の子音連続に関しては、川越 (1995) が行った調査で、子音連続 C₁C₂ (C₃) において、C₁ が阻害音であっても C₂ または C₃ が[t]か[k]の場合には促音化しないことを明らかにしている。

今回の調査でも単音節語で促音を持つ 149 語のうち、語末に子音連続を持つ 7 語はいずれも語末子音が[ks] (ミックス、ボックス等) であり、語末子音が[pt][kt][kst]となる 4 語では促音化が起きていないことがわかった。

弛緩母音+[g]については、有声破裂音の促音化は、他の無声阻害音に比べて起こりにくいことがこれまでの研究でも述べられている (国立国語研究 1990、川越 1995)。今回の調査では、弛緩母音+有声破裂音[g]で促音が挿入された語が 7 語 (スモッグ、ドラッグ、ペッグ、バッグ、フォッグ、フラッグ、ウィッグ)、挿入されなかった語が 5 語 (ギャグ、スラグ、プラグ、ブログ、ログ) であった。[g]の前に来る弛緩母音からも規則性を見出すことはできず、フラッグ、ペッグはそれぞれフラグ、ペグと表記される場合もあることから、促音挿入の有無は非常に不安定であることがうかがえる。

次に、3 モーラ音節の忌避という現象がある。窪菌・太田 (2001) では、以下のように述べている。

日本語は本来、CV という音節構造を基調としているため、3 モーラの音節は生起しにくい。しかし、英語などの外国語から単語が借用される過程や複合語形成の過程において、CVVC や CVCC という構造の音節が生じる可能性が存在する。

つまり、英語で/em/という音連続の語が日本語に取り入れられると、短母音化して/en/となるわけである。この他に、3 モーラ音節を2 モーラ音節に変える現象として、「二重母音を中間の音色を持つ単一母音の融合する母音融合」（窪菌・太田 2001）も観察された。これによって、ounce[aʊns]という3 モーラ音節語の[aʊ]が[o]に融合され、「アウンス」ではなく「オンス」という2 モーラ音節となって日本語に取り入れられることが実現している。

表2 借用語適応規則の例外（単音節語）

促音化	語末の子音連続 ([kst][kt][pt])	テ <u>キ</u> スト、ア <u>ク</u> ト、スクリ <u>プ</u> ト ダ <u>ク</u> ト
	弛緩母音 + [g]	ギャ <u>グ</u> 、スラ <u>グ</u> 、プラ <u>グ</u> 、ブロ <u>グ</u> ロ <u>グ</u>
3 モーラ音節 忌避	母音融合	オンス ouns /aʊns/
	英語/em/→日本語/en/	チェンジ change/tʃeɪndʒ/ レンジ range/reɪndʒ/
借用語適応の通 時的変化	挿入母音[u]→[i]	ブラ <u>シ</u> 、デッ <u>キ</u> 、ステー <u>キ</u> 、サッ <u>シ</u> ジャッ <u>キ</u>
	挿入母音英語[i]→日本語[e]	ス <u>テ</u> ッチ、ス <u>テ</u> ッキ
つづり字の影響	英語[ʌ]→日本語[o]	ス <u>ポ</u> ンジ sponge、グロ <u>ー</u> ブ glo <u>ve</u>
	長音挿入	ウール wool /wʊl/

4.2.2 二音節語

4.2.2.1 二音節語の促音化

二音節語で、促音を持つ語は 162 語で、そのうち原語の語末音節の末尾子音で起こる促音化（以下、語末の促音化とする）が 97 語（58.4%）、原語の語頭および語中音節の末尾子音で起こる促音化（以下、語中の促音化とする）が 69 語（42.6%）であった。

前章では語末に子音連続 C1C2 がある場合、C1C2 の音韻環境によって促音化する場合としない場合があることを述べたが、二音節語ではさらにその問題が複雑になる¹¹。以下の表

¹¹ Cambridge Dictionary of American English では、[sɪ][tɪ]のような語末子音連続の音声表記は[səl][təl]で表示されているため、ここでは二音節語として扱っている。

3 は、二音節語の中で、弛緩母音に後続する子音連続を、促音を持つ語と促音を持たない語に分類したものである。弛緩母音に同じ無声破裂音[k]が後続する場合でも、その次に来る子音が[s]であれば促音化し、[t]であれば促音化しないという差がはっきりと表れている。

表 3 弛緩母音に後続する子音連続の促音化

	促音あり		促音なし		語例
弛緩母音+	ks	10	0		デラ <u>ッ</u> クス、コンプレ <u>ッ</u> クス、リラ <u>ッ</u> クス
	kt	0	10		インバ <u>ク</u> ト、オブジェ <u>ク</u> ト、セレ <u>ク</u> ト
	kl	5	0		タ <u>ッ</u> クル、ジャ <u>ッ</u> カル、ニ <u>ッ</u> ケル
	dl	0	5		サ <u>ド</u> ル、ミ <u>ド</u> ル、モ <u>デ</u> ル、ペ <u>ダ</u> ル、ミ <u>ド</u> ル
	tl	1	4		スロ <u>ッ</u> トル、ケ <u>ト</u> ル、シャ <u>ト</u> ル、バ <u>ト</u> ル、
	bl	0	3		ダ <u>ブ</u> ル、ドリ <u>ブ</u> ル、バ <u>ブ</u> ル
	sl	2	0		ハ <u>ッ</u> スル、ホイ <u>ッ</u> スル
	pt	0	2		アダ <u>プ</u> ト、コンセ <u>プ</u> ト
	pl	2	1		ア <u>ッ</u> プル、カ <u>ッ</u> プル、トリ <u>プ</u> ル
	gl	1	1		ジャ <u>ッ</u> グル、ゴー <u>グ</u> ル

さらに、弛緩母音+阻害音という、促音を引き起こす力を持つ音韻環境下において、その文節位置による促音化の発生率に違いがあるかを調査した。その結果、促音を持つ 162 語のうち、弛緩母音+阻害音という音韻環境下では、語中の促音化 59 語、語末の促音化 85 語であった。さらに、語中・語末両方にその音韻環境がある語は 18 語であった。一方、促音を持たない 78 語においては、語中に弛緩母音+阻害音があるのが 58 語、語末が 16 語、語中・語末両方にあるのが 4 語という結果であった。

表 4 弛緩母音+阻害音の位置による促音化

促音あり (162)	弛緩母音+阻害音の位置		促音なし (78)	弛緩母音+阻害音の位置	
	語中 59	(例) ハッピー/hæ <u>p</u> .i/		語中 58	(例) リクルート/r <u>ɪ</u> k <u>l</u> .rut/
	語末 85	(例) コミック/ka.m <u>ɪ</u> k/		語末 16	(例) コンセプト/kan.se <u>p</u> t/
	両方 18	(例) バスケット/bæ.s <u>k</u> ɪt/		両方 4	(例) アクセス/æ.k.s <u>ɛ</u> s/

国立国語研究所(1990)では、「2音節以上の語の場合には、促音化は、原則的に1語につき1回しか起こらない」と述べられているが、促音を持つ語のうち、語中と語末両方に促音を引き起こす力を持つ音韻環境がある18語は、全て語末で促音化していることがわかった¹²。これにより、二音節語では、弛緩母音+阻害音という音環境が語中と語末両方にあ

¹² 例外として語中と語末に弛緩母音+阻害音があり、両方とも促音化している語に「コックピット」が挙げられる。しかしこの語は、cock(鶏)とpit(囲い)から由来している複合語であるためだと思われる。

る場合は、語末が優先されるということが言えるであろう。

また、語末の促音環境を、子音別に分類したところ、表5のような結果となり、促音化した語としなかった語では語末子音および子音連続が全く異なっていることがわかった。このことから、二音節語において、語末で弛緩母音に子音の[t]もしくは[k]が単独で後続する場合は、例外なく促音化するということが言える。

表5 語末の音環境と促音化

語例	促音あり		促音なし		
ボケ ^ッ ト、メリ ^ッ ト、ロボ ^ッ ト	-t	52	-dʒ	8	パセ ^ー ジ、ランゲ ^ー ジ、イメ ^ー ジ
アタ ^ッ ク、コミ ^ッ ク、ライラ ^ッ ク	-k	27	-kt	7	セレ ^ク ト、インパ ^ク ト、コンパ ^ク ト
デラ ^ッ クス、リラ ^ッ クス、デラ ^ッ クス	-ks	8	-pt	2	コンセ ^プ ト、アダ ^プ ト
ギャロ ^ッ プ、ゴシ ^ッ プ、ケチャ ^ッ プ	-p	5	-dl	2	サ ^{ドル} 、ミ ^{ドル}
デニ ^ッ シュ、ラディ ^ッ シュ、フィニ ^ッ シュ	-ʃ	4	-s	1	エクスプレ ^ス
キュービ ^ッ ド、ハイブリ ^ッ ト、モペ ^ッ ド	-d	3			
オストリ ^ッ チ、サンドイ ^ッ チ	-tʃ	2			

次に促音化しなかった語における語頭・語中の音韻環境を見てみたところ、「アクション」「エクストラ」のように、弛緩母音+障害音が語頭にくる語では、促音化した語が4例だったのに対し、促音化しなかった語は22例という結果であり、語頭では、弛緩母音+障害音という音韻環境下にあっても促音化が起きにくいということがわかった。

表6 語頭の弛緩母音+障害音での促音化

語例	促音あり	促音なし	語例
エ ^ッ セー、エ ^ッ セス	弛緩母音+[s]	弛緩母音+[k]	ア ^ク ション、ア ^ク セス、ア ^ク セント、ア ^ク タイプ、ア ^ク ネ、エ ^キ サイト、エ ^キ スパート、エ ^ク スチェンジ、エ ^ク スプレス、エ ^ク スポーツ、エ ^コ ー
ア ^ッ プル	弛緩母音+[p]	弛緩母音+[s]	ア ^ス ファルト、ア ^ス ペクト、エ ^ス ケープ、オ ^ス トリッチ
エ ^ッ チング	弛緩母音+[tʃ]	弛緩母音+[b]	ア ^ブ ストラクト、オ ^ブ ジェクト
		弛緩母音+[d]	ア ^ダ ルト、ア ^ド レス、
		弛緩母音+[t]	ア ^ト ム、ア ^ト ラス
		弛緩母音+[p]	オ ^ブ ション

これまで述べてきた単音節語、二音節語の促音化現象を図式化すると以下のようにまとめることができる。

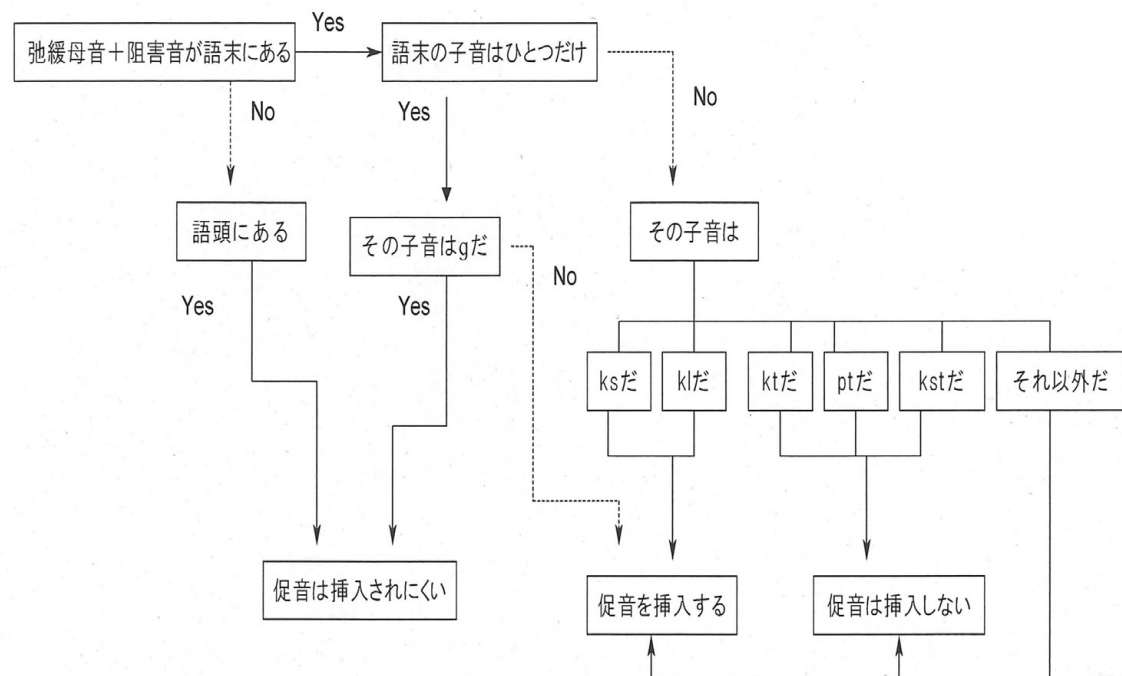


図 1 促音化現象の図式化

4.2.2 二音節語における借用語適応の例外

二音節語では、単音節語と同様に 3 モーラ音節の忌避、借用語適応の通時的変化が見られる他、強勢のない音節で語末のつづりが < age > の語に、強勢のある音節の発音（例：wage[weɪdʒ]、rage[reɪdʒ]）から類推したと見られる例が見られた。

つづりの影響と見られる例外もあり、大きく 2 つに分けることができる。これらは原語においても表記と音韻の対応が例外的であるため、より一般的な原則に収斂されたとと言える。

まず、“onion” や “monkey” のように原語ではつづりが < o >、発音が [ʌ] となる語が、つづりに合わせるように [o] と置き換えられる例である。成田（2009）によれば、中舌母音 [ʌ] に対応するつづりは、cup や cut のようにつづりが < u > となる語が全体の 91% であり、onion や monkey のようにつづりを < o > とする語は例外的でわずか 7%（70 語ほど）であるという¹³。

¹³ 1250 年頃から写本を判読する際、m や n の前において、視覚的混乱をさける手段としてつづりが変化したという（成田 2009）。

つぎに、“hammer”や“running”のような重子音つづり字において、ハンンマー、ランングのように原語にはない不要な/n/が挿入される例である。このような語に関して、成田（2009）は、鼻音[m]および[n]に対応するつづりが〈m〉である割合が96%であるのに対し、〈mm〉である割合は3%、〈n〉ある割合が97%であるのに対し、〈nn〉である割合は1%と非常に稀であると述べている。

表7 借用語適応規則の例外（二音節語）

3 モーラ音節 忌避	英語[em]→日本語[en]	ア <u>レ</u> ン <u>ジ</u> 、エクス <u>チ</u> ェン <u>ジ</u> 、 <u>エ</u> ン <u>ゼ</u> ル、スト <u>レ</u> ン ジャー
借用語適応の通 時的変化	挿入母音[u]→[i]	エ <u>キ</u> ストラ、エ <u>キ</u> スパート、エ <u>キ</u> サイト テ <u>キ</u> スタイル、テ <u>キ</u> スチャー
	英語[i]→日本語[e]	マ <u>ネ</u> ー、 <u>レ</u> バー (liver)
つづり字の影響	英語[ʌ]→日本語[o]	オ <u>ー</u> ブン <u>o</u> ven、オ <u>ニ</u> オン <u>o</u> nion、 <u>モ</u> ンキ <u>ー</u> <u>o</u> nkey
	英語[i]→日本語[e]	ア <u>ク</u> ネ <u>a</u> cne
	英語[z]→日本語[s]	コ <u>ス</u> モス <u>c</u> osmos
	重複子音による撥音 添加	イン <u>ナ</u> ー (<u>i</u> nn <u>e</u> r)、カン <u>ン</u> グ (<u>c</u> un <u>n</u> i <u>n</u> g) コ <u>ン</u> マ (<u>c</u> o <u>m</u> m <u>a</u>)、ジ <u>レ</u> ン <u>マ</u> (<u>d</u> i <u>l</u> e <u>m</u> m <u>a</u>) シン <u>ナ</u> ー (<u>t</u> h <u>i</u> n <u>n</u> e <u>r</u>)、チャ <u>ン</u> ネル (<u>c</u> h <u>a</u> n <u>n</u> e <u>l</u>) トン <u>ネ</u> ル (<u>t</u> u <u>n</u> n <u>e</u> l)、マン <u>モ</u> ス (<u>m</u> a <u>m</u> m <u>o</u> t <u>h</u>) ラン <u>ン</u> グ (<u>r</u> u <u>n</u> n <u>i</u> ng)、ハン <u>モ</u> ック (<u>h</u> a <u>m</u> m <u>o</u> ck) ハン <u>マ</u> ー (<u>h</u> a <u>m</u> m <u>e</u> r)
	語末の - age	アベ <u>レ</u> ージ、イメ <u>ー</u> ジ、ガ <u>レ</u> ージ、コッ <u>テ</u> ージ、 サル <u>ベ</u> ージ、ソー <u>セ</u> ージ、ダ <u>メ</u> ージ、バ <u>ゲ</u> ージ、 パッ <u>ケ</u> ージ、パ <u>セ</u> ージ、バン <u>テ</u> ージ、ビン <u>テ</u> ージ、 プレス <u>テ</u> ージ、ボル <u>テ</u> ージ、メッ <u>セ</u> ージ、モー <u>ゲ</u> ージ、ラン <u>ゲ</u> ージ
無声化	英語[g]→日本語[k]	グロッキー <u>g</u> roggy[<u>g</u> ra <u>g</u> i]、ハイブリット <u>h</u> ybrid
	英語[d]→日本語[t]	[<u>h</u> a <u>t</u> brid]

4.2.3 三音節以上の語

三音節以上の語は日本語になると5モーラ以上になることがほとんどであり、モーラ数を軽減させるような働きが特徴である。まず、二音節語では必ず促音化していた語末の[k]が促音化しない例が見られる。対象語彙では2語しか見られなかったが、語末が「クス」になる語を電子辞書（Canon wordtankV903）に収録されている『大辞林』の逆引き検索機能で調べてみると、「ダイナミクス」「ケミトロニクス」「バイオインフォマティクス」と

いった主に学問を表す英語借用語において非促音化も多く見られることがわかった。

表 8 語末の音環境と促音化

語例	促音あり	促音なし	語例
アコースティ <u>ック</u> 、ドメスティ <u>ック</u>	-k 28	-dʒ 1	アドバンテ <u>ー</u> ジ
クラリネ <u>ット</u> 、シガレ <u>ット</u> 、アクロバ <u>ット</u>	-t 8	-ks 2	エアロビ <u>クス</u> 、エレクトロニ <u>クス</u> ¹⁴
オーソド <u>ックス</u> 、アペンディ <u>ックス</u>	-ks 3	-ps 1	アボカリ <u>プ</u> ス
スカラシ <u>ップ</u>	-p 1		

3 モーラ音節の忌避は、単音節や二音節でも見られたが、新たに二重母音や三重母音において、母音の一部が脱落するという例があり、“coordinate” や “cooperation” のように /kou.ɔ/ と母音が 3 つ連続する語で「コーディネート」「コーポレーション」と /ɔ/ が脱落する例が見られた。

三音節以上の語は、単音節語、二音節語よりも少ないにもかかわらず、つづり字の影響と見られる借用語適応の例外も幅広い。このことから、音節数が増える（日本語に借用された時のモーラ数が増える）につれて、純粋に音韻以外の要因が影響を及ぼしてくるということが考えられる。そういった意味では、日本語教育における外来語指導をするにあたっては、二音節までの語と三音節以上の語は分けて考える必要があると言える。

表 9 借用語適応規則の例外

3 モーラ音節 忌避	英語 /eɪ/ → 日本語 /e/	コン <u>テ</u> ナー
	英語 /aʊ/ → 日本語 /a/	フ <u>ァ</u> ン <u>デ</u> ーション
	英語 /eɪə/ → 日本語 /eja/	コン <u>ベ</u> ヤー
	英語 /ɪə/ → 日本語 /e/	バラ <u>エ</u> ティー
母音の脱落	英語 /oʊə/ → 日本語 /oʊ/	コーディネート coordinate /kou <u>o</u> ɔdneɪt/
借用語適応の通 時的変化	挿入母音 [u] → [i]	エ <u>キ</u> シビション、エ <u>キ</u> セントリック、タ <u>キ</u> シー ド、フレ <u>キ</u> シブル、レ <u>キ</u> シコン、エ <u>キ</u> ゾチック
つづり字の影響	英語 [ʌ] → 日本語 [o]	<u>コ</u> ンパニー company [kʌmpəni]
	英語 [u] → 日本語 [o]	ア <u>コ</u> ースティック acoustic [əkustik]
	英語 [ɪ] → 日本語 [e]	ア <u>ネ</u> クドート、エクス <u>テ</u> リア、 <u>エ</u> ナメル、 <u>エ</u> レ クトロニクス、ジフ <u>テ</u> リア、 <u>デ</u> ザート、 <u>デ</u> リバ ティブ、バー <u>ベ</u> キュー、ハイ <u>エ</u> ナ、バク <u>テ</u> リア、 プ <u>レ</u> ミアム、 <u>ヘ</u> リウム、 <u>レ</u> オタード、 <u>レ</u> キシコ ン

¹⁴ 「エレクトロニクス」の原語は electronic である。

	英語[a]→日本語[e]	カ <u>レ</u> イドスコープ kaleidoscope [kəlaɪəskou̯p]
	英語[z]→日本語[s]	コ <u>ス</u> メチック、コ <u>ス</u> モポリタン
	重複子音による撥音添加	ア <u>ン</u> モニア、シ <u>ン</u> メトリー、マ <u>ン</u> ネリズム
	語末の - age	アドバ <u>ン</u> テージ
	英語[ei]→日本語[a] 英語[ai]→日本語[i]	ウ <u>ラ</u> ニウム、オ <u>ア</u> シス、スタ <u>ジ</u> アム、ゼ <u>ラ</u> ニウム セロ <u>フ</u> ァン、 <u>マ</u> ニア、 <u>ラ</u> ジウム、 <u>ラ</u> ジエーター シ <u>ロ</u> ホン
無声化	英語[g]→日本語[k]	エ <u>キ</u> ゾチック
有声化	英語[k]→日本語[g]	ジャ <u>グ</u> ジー jacuzzi [dʒəkuzi]

4.3 日本語教育への応用

中山（2012）では、外来語習得について「カタカナ表記を見て発音練習をし、書く練習をする」というように徹底的に「日本語の語彙」として教えたらどうだろう」と述べられている。しかしながら、日本国内の日本語教育機関で使用されている代表的な初級日本語教科書4種と日本語能力試験対策の語彙参考書1種¹⁵では1種につきおおよそ100語以上の外来語が提出されている¹⁶。これらを和語や漢語とは別に日本語として覚えるのは学習者への負担を考えるといささか無理があるように思える。

たしかに通時的変化によって借用語適応の規則が変化した語や英語以外の言語由来の外来語は、母語話者もそうであるように、見て覚えるしかないだろう。しかしながら前述の初級日本語教科書・参考書5種に提示されていた外来語述べ412語のうち298語は純粋に英語語彙を由来とすることを鑑みれば、外来語を十把一絡げに取り扱うのではなく、導入方法や指導方法を分けて考える必要性が十分にある。

表 10 初級日本語教科書5種の外来語

外来語の種類	語例	用例数
英語語彙	カレンダー、クッキー、スタッフ	298
合成語	ガイドブック、サングラス	61
借用語適応の通時的変化	ブレーキ、ブラシ、ケーキ	7
英語以外の言語	アルバイト、アンケート	20
和製英語	ホッチキス、シャープペンシル	4
省略語	アパート、テレビ、エアコン	19

¹⁵ 『できる日本語』、『初級日本語げんき』、『みんなの日本語 初級Ⅰ・Ⅱ』、『初級日本語上・下』、『日本語能力試験対策日本語総まとめ N3』

¹⁶ できる 137 語、げんき 117 語、みんな 160 語、初級 99 語、総まとめ 124 語

混種語	ガスコンロ、けしゴム	3
総数		412

借用語適応の規則を日本語教育に应用するという観点から以下の4点が挙げられる。

- (1) 単音節語では、通常の借用語適応規則が適用できる語が95%以上ある。そのため、以下の図2のように規則を図式化し提示することが有効ではないかと考える。
- (2) 促音はさまざまな要因により生成されるため、全ての要因を体系的に網羅することは不可能である。しかしながら、二音節までの語における促音化は、語末に子音連続を持つ語の場合、語末子音が[kʰ][k]であれば促音化し、[pʰ][tʰ][kʰ][dʰ]では促音化しないことがわかった。
- (3) 三音節以上の語では、つづり字の影響やモーラ数を減らすような働きが多く見られ、規則の例外が多数を占めるため、二音節までの語と三音節以上の語の借用語適応は分けて考えるべきである。
- (4) 「チェンジ」、「イメージ」、「ランニング」、「エキストラ」のように例外にも法則を見出すことができるため、このような例外も類型化して指導することが効果的である。

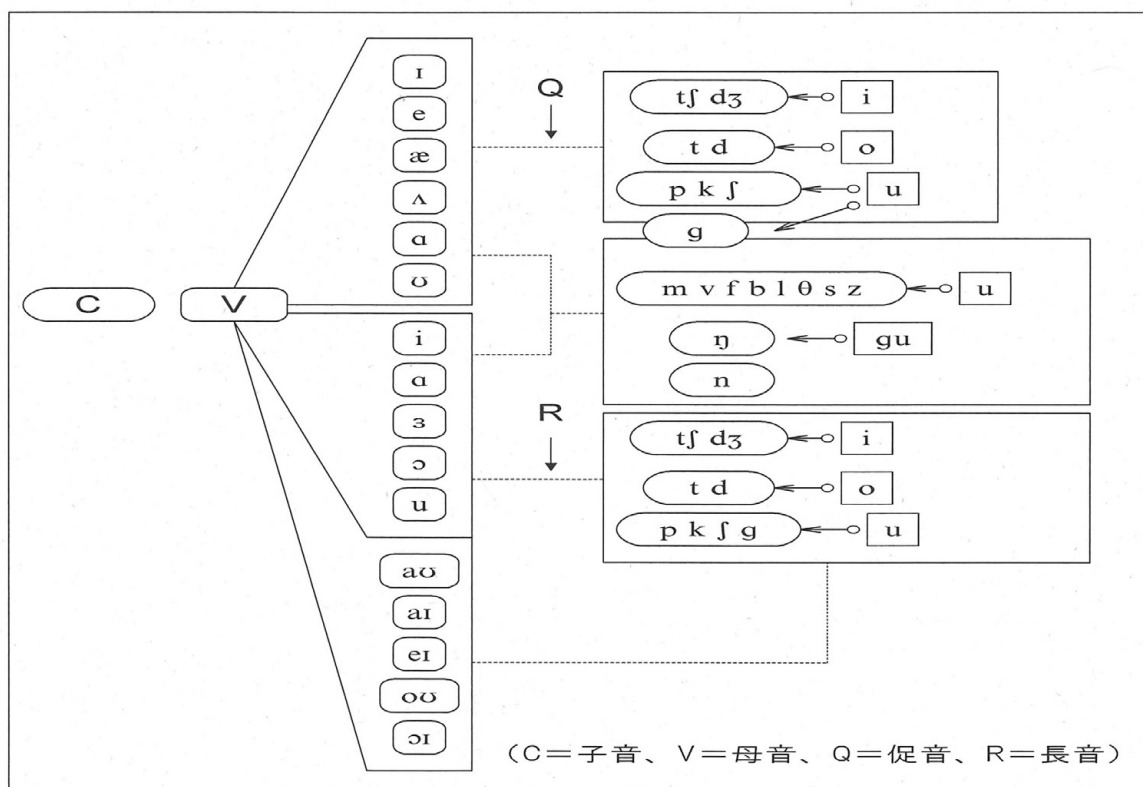


図2 CVC構造の語における借用語適応

第5章 インドネシア人学習者における借用語適応

5.1 研究の目的

これまで、学習者を対象とした外来語の書き取り調査には、英語母語話者を対象にした調査（大曾 1991、小林他 1991、茜 1998）、韓国語母語話者を対象とした調査（鄭 1995）、韓国語母語話者とブラジル・ポルトガル語母語話者を対象とした調査（中東 1998）、中国語母語話者を対象にした調査（顧 2012）、タイ語母語話者を対象とした調査（木本 2003）などがあり、調査はいずれも原語である英語の単語を提示し、それをカタカナ表記するという方法で行っている。

本調査は、インドネシア語が英語と同じアルファベット表記であることと英語から借用している語彙が広く浸透していることに着目し、インドネシア人学習者を対象に行った。

これまでの研究同様に日本語、英語、母語という 3 つの言語がどのように影響し合うかを調査するとともに、母語における表記体系が外来語習得に及ぼす影響についても考察する。

5.2 インドネシア語における借用語の位置づけ

5.2.1 インドネシア語の借用語

インドネシア語は、もともとマラッカ海峡における交易国間のリングフランカであったマレー語が、インドネシア共和国の独立により国語として制定された言語である。三宅（2012）によれば、インドネシアで使用されている多数の地域言語からひとつのみを選び出すことの難しさや、人口の半分以上をジャワ人が占めるという背景からジャワ語封建主義的色合いが強かったことなどから外国語であったマレー語がインドネシア語という名称に代わってインドネシアの国語に変わったという。Badudu（2003）によれば、表 1 に見られるように、イタリア語、ドイツ語、フランス語、ポルトガル語、サンスクリット語など 20 以上の言語から借用しており、特にオランダの旧宗主国であったという歴史的背景や、国民の 90%以上がイスラム教徒であるという宗教的背景からオランダ語とアラビア語からの借用語が多いという。今日、インドネシア語に取り入れられている借用語はほとんど英語からであるが、例えば **reform**（リフォーム）という英語由来の語は、オランダ語の **reformatie** に従い、**reformasi** となるように、英語借用語であっても語末の変化にオランダ語の影響が見られるという特徴がある。

また、インドネシア語において英語借用語は、もともとインドネシア語に存在しなかった概念やことばを表現するために使用されることが多く、主に政治や経済、テクノロ

ジーの分野において多く借用されているという。

表1 インドネシア語で使用されている借用語の例

語源	インドネシア語 表記	日本語	語源	インドネシア語 表記	日本語
オランダ語	mesin	マシーン	英語	telepon	テレホン
イタリア語	stakato	スタックアート	日本語	taiso	体操
ドイツ語	umulaut	ウルムラウト	中国語	cawan	茶碗
フランス語	maneuver	マヌーバ	ロシア語	troika	トロイカ
サンスクリット語	nirwana	ニルバーナ	ラテン語	symposium	シンポジウム

5.2.2 インドネシア語の音韻体系

インドネシア語は、アルファベットで表記され、文字と音韻がほぼ規則的に対応する言語である¹⁷。母音は日本語の5母音の他に[a]があるが、[e]も[a]も〈e〉と表記される。子音では、石綿（2012）が英語とマレー語を比較し、「[f]と[v]がマレー語には欠けており、[f]と[p]および[v]と[p]は自由異音になっている」「英語のつづりで<th>であらわされる音は、多くのマレーシア人にとって、英語を話している時ですら困難を感じる音であり、[t]や[d]で発音されることが多い。外来語でも[t]や[d]に置き換えられる」と述べているが、マレー語を基とするインドネシア語でも同じであり、[v]→[p] や[θ]→[t]のように音素の置き換えが見られる。また、インドネシア語にも[j]という音自体はあるものの、英語の[j]がインドネシア語に取り入れられると、概ね借用語適応によって、[s]となる。また、英語の歯茎接近音[ɹ]はインドネシア語に取り入れられると歯茎ふるえ音[r]になり、さらに文字と音韻が規則的に対応するという性質から、日本語では「バー」となる英語のbar [ba:]がインドネシア語に取り入れられると、bar [bar]と俗に言う「巻き舌のr」で発音される。

また、以下（1）、（2）のように、原則的に二重子音を用いないというインドネシア語の音韻体系により、語頭や語末では二重子音がひとつの子音になる現象も見られる。

- （1）英語：store → インドネシア語：setor
- （2）英語：object→インドネシア語：objek

さらに、英語から日本語、インドネシア語双方への借用語適応において最も大きな違いは、インドネシア語は原語の発音よりもつづり字が優先されることである。例えば英語のremote [ɹɪmout] は、つづりが優先されることによって remote [remote] とローマ字読みされる。

¹⁷ 表記と音韻が異なる例として右のような例がある。にぎやか ramai[rame]、島 pulau[pulol]

表2 三言語の音韻対応

母音			子音		
日	英	イ	日	英	イ
[a]	[ɑ]	[a]	[s] オーソドックス	[θ] ortho <u>th</u> odox	[t] ort <u>o</u> doks
	[æ]		[f] フラ <u>n</u> ス	[f] fra <u>n</u> ce	[p] pe <u>r</u> ancis
	[ʌ]		[b] レボリ <u>u</u> ーション	[v] revo <u>l</u> ution	[f] revo <u>l</u> si
[i]	[i]	[i]	[l] レ <u>l</u> ース	[l] la <u>l</u> ce	[l] le <u>l</u> s
	[ɪ]		[ɾ] ラ <u>l</u> ケット	[r] ra <u>l</u> cket	[r] ra <u>l</u> ket
[u]	[u]	[u]	[ʃ] キャ <u>l</u> ッシュ	[ʃ] ca <u>l</u> sh	[s] ka <u>l</u> s
	[ʊ]		[kja] キ <u>l</u> ャンパス	[kæ] ca <u>l</u> pus	[ka] ka <u>l</u> pus
[e]	[e]	[e]	[kj] ドキ <u>l</u> ュメンタリー	[kj] do <u>l</u> umentary	[k] do <u>l</u> umenter
	[ɛ]		[nj] ニ <u>l</u> ュース	[nj] ne <u>l</u> ws	[n] ny <u>l</u> s
[o]	[o]	[o]	[ta:]コンピ <u>l</u> ューター	[tə]compu <u>l</u> ter	[ter]compu <u>l</u> ter
	[ɔ]		[ngu]ゴ <u>l</u> ング	[ŋ]go <u>l</u> ng	[ŋ]go <u>l</u> ng

5.3 調査の概要

インドネシア国内の大学で日本語を専攻するインドネシア人初級学習者（学習期間約 6 ヶ月）24 名を対象にディクテーションテストの形式で調査を行った¹⁸。調査は、インドネシア人教師がインドネシア語と日本語に共通して使用されている英語の語彙（表 3-②）をインドネシア語（表 3-③）で読み上げ、それを日本語でカタカナ表記（表 3-①）してもらうという方式で行った。なお、解答用紙には、原語である英語のつづりも合わせて記入してもらったが、無回答、発音の似た別の外来語と聞き間違えていた場合、同義のインドネシア語をカタカナで表記していた場合等は調査対象から外した。

調査対象語彙は、インドネシア語、英語、日本語における音韻体系の相違から鑑みて表記に誤りが起きにくいと考えられるⅠ）と、誤りが起こりやすいと考えられるⅡ）～Ⅳ）に分類し、この条件においてインドネシア語でも広く浸透している英語借用語 10 語を選定した。

- Ⅰ）日本語、インドネシア語のいずれにおいても、借用語適応による音韻変化が少ない語（1.カメラ、2、メモ）
- Ⅱ）英語からインドネシア語への借用語適応において、オランダ語の影響を受け、語末の

¹⁸本調査の対象者であるインドネシア人日本語学習者は、家庭内でスンダ語やジャワ語などの地方語を第一言語として使用している場合もあるが、本調査では、公用語であるインドネシア語を母語として論を進める。

語形が変化している語 (3.テスト 9.アクション、10. デコレーション)

Ⅲ) 英語からインドネシア語への借用語適応において、つづり字が優先された音韻変化が起きている語 (6. ビスケット、7.ソース 8.フォーマル 10. デコレーション)

Ⅳ) 借用語適応において、日本語とインドネシア語では対応する音韻が異なる語 (4.ミュージック、5.キャッシュ)

表 3 調査対象語彙

	①日本語	②英語	③インドネシア語
1	カメラ [kamera]	camera [kæmə.ɪə]	kamera [kamera]
2	メモ[memo]	memo[memoʊ]	memo [memo]
3	テスト[tesuto]	test [test]	tes [tes]
4	ミュージック [mju:dzikkʊ]	music [mjuzɪk]	music [musik]
5	キャッシュ [kjaʃʃʊ]	cash [kæʃ]	kas [kas]
6	ビスケット [bisuketto]	biscuit [bɪskət]	biscuit [biskuit]
7	ソース [so:su]	sauce [sɔ:s]	saus [saus]
8	フォーマル [fɔ:maru]	formal [fɔ:ml]	formal [formal]
9	アクション [akuʃon]	action [ækʃən]	aksi [aksi]
10	デコレーション [dekore:ʃon]	decoration [dɪkəleɪʃən]	dekorasi [dekorasi]

5.4 結果と考察

5.4.1 借用語適応による音韻変化が少ない場合

I)に挙げた「カメラ」「メモ」は、英語から日本語・インドネシア語いずれの言語に取り入れられた際も、借用語適応による大きな音韻変化やつづり字の影響が見られない語である。これらの語は、誤表記が極めて少ないであろうという予測であったが、「カメラ」が予想通り正答率 100%であった一方で、「メモ」では、「メーモ」と不要な長音が添加された例が全体の 38%となる 8 例も見られた (表 6 参照)。これまでの先行研究では、日本語に取り入れられた際に、促音挿入や開音節化といった音韻変化が起きる語を対象に行われてきたが、「メモ」を「メーモ」とするような、本来は不要な長音添加にも一定の傾向が見られる可能性を示唆していると言えるだろう。

5.4.2 オランダ語の影響

Ⅱ) はオランダ語の影響を受けた語である。谷口 (1974) はインドネシア語におけるオランダ語の影響について以下のように説明している (下線は筆者による)。

独立以来、国際語としての英語がインドネシア語に最も大きな影響を与えているが、インドネシアの知識階級は最も本格的な教育をオランダ語によって受けていたため、英語はオランダ語で一度ふるいにかけるという経過がとられた。したがって、インドネシア語化された英語にもオランダ語のにおいが微妙にからんでいる。

谷口が述べた「オランダ語で一度ふるいにかけた」インドネシア語の特徴としては、主に以下のような語末形態素の変化が挙げられる。

表 4 インドネシア語におけるオランダ語の影響

英語	インドネシア語	語例
-tion	-si	kondisi 条件、deginisi 定義、informasi 情報
-t	φ	ekspor 輸出、impor 輸入、paspor 旅券
sive / -tive	-tip	aktif 積極的、pasip 消極的
-ter	-tor	faktor 要素、motor 発動機
-ty	-tas	universitas 大学、realitas 現実
-ist	-is	nasionalis 民族主義者

上記の例から語末-tion の語と-t の語を取り上げ、調査した。まず、語末の-tion であるが、学習者のカタカナ表記には、「アクション」「デコレーション」を「アクシ」「デコラシ」とする例が多く見られると予測していたが、結果としては回答者全員が英語のつづりを正確に書いていたことから、語形変化の認識不足による誤りはほとんどないということがわかった。

しかしながら、この語末の-tion を「ション」と正確に表記できていた例は 43 例中 14 例と 30%にとどまり、ローマ字読みしたと見られる誤りで「シオン」が 14 例、「ティオン」が 1 例見られた。加えて、「デコラシオン」のようにローマ字読みで「デコラ」としている例も 22 例中 15 例と半数以上であったことから、語形の変化は認識しているものの、ローマ字読みの傾向が非常に強いことがわかった。

次に語末が t の語である。「テスト」を「テス」としてしまう誤用が多いという予測であったが、これに関しても語末の/t/が借用語適応において消失しているという認識はあるようで、英語のつづりおよび日本語のカタカナ表記はいずれも正答率 100%であった。

ただ、「テスト」は日常語であり、授業の中でも頻繁に使用されるため基礎語彙として定着している可能性が高い。調査対象語 (6) の「バスケット」では、「ビスクイット」「ビスケ」とする例が 1 例ずつ見られたことに加え、予備調査でも興味深い回答があったのでここで紹介したい。予備調査でも本調査と同じ条件で調査を行ったが、調査語彙には「インスタント」「コンサート」という原語の語末が t で終わる語が含まれていた。このふたつの語の回答では、日本語表記において「ト」の脱落した「インスタン」と表記した例が 25 例中 7

例見られ、そのうち 5 例では英語のつづりが正しく表記できていたのにもかかわらず「ト」が脱落していた。

表 5 「インスタント」「コンサート」の表記

英) instant 日) インスタント <u>ト</u>	英) instan 日) インスタン	英) instant 日) インスタン	英) instant 日) インスタント <u>ト</u>
17	2	5	1

一方、「コンサート」の正答率は 100%であった。「コンサート」の表記の正答率が高かった要因として、“concert”にあたるインドネシア語本来の語が存在せず、インドネシア語となった“konser”の認知度が高いため基礎語彙として定着しているためではないかと考えられる。もうひとつ考えられるのは、日本のポップカルチャーを通して日本語に興味を持った若年層の学習者にとっては、「コンサート」という日本語になじみが深いからということも考えられるが、これについてはフォローアップインタビューを行うなどして調査する必要がある。

5.4.3 インドネシア語の音韻体系による影響

Ⅲ) では、インドネシア語の音韻体系と表記体系の両方が影響したと見られる誤りが考えられる例として「ビスケツ」「ソース」「フォーマル」「デコレーション」を挙げた。結果としては、英語のつづりは正確に表記できているものの、母語の表記体系の影響から「ビスクイット」「サウス」「フォルルマル」「デコラシオン」のようにローマ字読みしてしまっている例が半数以上見られた。

第一章で“confirm”を「コンフィルム」としたインドネシア人母語話者の誤表記の例を紹介したが、日本語能力が上がり比較的自由に外来語を使いこなせる段階になっても、ローマ字読みしてしまうという母語干渉が上級になっても残るということがうかがえる。

5.4.4 日本語とインドネシア語では対応する音韻が異なる語の場合

Ⅳ) は、日本語とインドネシア語の音韻体系の違いから誤りが起こると考えられる「ミュージック」「キャッシュ」である。いずれも正答率 0%であり、インドネシア語にはない音素に関して誤答が目立つ結果となった。特に「ミュージック」は促音、長音、拗音が入っており、初級学習者にとっては非常に難度が高かったようである。インドネシア語には存在しない[mju][kja]という音をどのように表記するかであるが、「ミュ」を「ム」と表記した例が、22 例中 13 例であり、「キャ」と正しく表記できたのは 1 例のみであった。また、[j]という音素自体はインドネシア語にもあるが、「シュ」では、22 例全てが「ス」または「シ」

と表記しているという結果になった。

表 6 インドネシア人日本語学習者の表記

日本語表記	誤	正	回答例
カメラ	22	22	
メモ	21	13	メモ (8)
テスト	22	22	
ミュージック	22	0	ムシク (6) ムシック (5) ムジック (2) ミュジック (3) ミュー ージク (2) ミューシク、ミューシック、ミュシク、ミュウシク 各 (1)
キャッシュ	22	0	ケース (10) ケッス (4) カス (2) ケーシ (2) キャスー、カー シ、カース、カスー 各 (1)
ビスケット	21	0	ビスクイト (9) ビスクイート (4) ビスキート (2) ビスキト (2) ビスキット、ビースキット、ビスクイッ、ビスケ 各 (1)
ソース	22	6	サウス (6) ソウス (5) サーウス (2) サウース、ソーソ他 各 (1)
フォーマル	23	4	フォルマル (3) ボルマル (3) フォーマー (3) ボルマ、ボルマ ー、ボルマール、フォルマー、フォルマール、フォーマール他 各 (1)
アクション	21	5	アクショーン (5) エクシオン (5) アクティオン、アクション、 エックシオン、アクソーン、エクショーン他各 (1)
デコレーション	22	3	デコラシオン (6) デコレーション (3) デコラシオン (3) デコ ラーソン (1) デコラティオン (1) デコラーソン (1) 他各 (1)

5.5 まとめ

以上、インドネシア人学習者がどのように英語借用語をカタカナ表記するかを見てきた。その結果、非英語母語話者であるインドネシア人学習者の外来語習得においては、英語からインドネシア語への借用語適応において起こる音韻変化や表記体系の影響も考慮すべきであることがわかった。

また、インドネシア人特有の誤りと見られる表記もあった一方で、母語が異なる学習者に共通して見られる表記の誤りもあるようだ。「インスタント」に見られたような[t]の脱落はオランダ語の影響によるものであると述べたが、大木 (2013) では、タイ人日本語学習者の誤表記の例として、「テント」を「テン」「テーン」とする例が見られたとしている。これは、タイ語には語末子音の[t]は存在するものの、「語末の/p, t, k, ʔ/は無開放となる」(竹林 2003) ためであると思われ、要因は異なっても、現象としては同じ[t]の脱落として生じ

ている。このような母語の異なる学習者がどのように母語もしくは原語から日本語へと借用語適応するかについては、同一の語彙で調査を行う必要性もある。この点に関しては今後の課題とし、母語によって見られる特徴的な表記と母語が異なっても共通して見られる表記を検証していきたい。

第6章 コーパス調査に基づく外来語表記のゆれ

6.1 調査の背景と目的

「メイク」なのか「メーカー」なのかといった表記のゆれは基準と慣用であり、一方が正しく、一方が誤りということは言えない。しかしながら、“逢引き”を意味する“date”は、日本語に入ってきた当初は「デイト」と表記されていた¹⁹ものの、現代では「デート」と表記されることが一般的である。「デイト」は、もっぱら“日付”を意味する“date”の表記に使用され、外来語使用の増加にともない、同音語が表記によって弁別されることも少なくない。

こうした背景から、表記のゆれが何を目安に変化するかを知る手だてがあれば、日本語教育にも応用できると期待し、外来語の表記に、これまで研究されてきた経年変化や世代差以外の要因もあるのかについて考察する。

6.2 調査の概要

6.2.1 調査の方法

国立国語研究所によって2011年に公開された『現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下、BCCWJ)』を用いて、1980年～2008年までに収録されたデータをもとに、「書籍」「Yahoo! ブログ・Yahoo! 知恵袋」「雑誌」「新聞」を中心に表記のゆれが起こる要因を調査する。なお、小椋(2014)によれば、BCCWJは、レジスターによってサンプル抽出年代に違いがあるため、調査資料として書き言葉の経年変化を調べる際に、レジスターを限定せずにコーパス全体を使って変化を見てしまうと、各レジスターの言語的性格が異なる上に、サンプルを抽出した年代にも違いがあるため、変化をうまく捉えられないことができない可能性がある」と指摘している。そのため、本調査では、コーパス全体を使っての経年調査とともに各レジスターのサンプル抽出年代と言語的性格を考慮し、「書籍(出版・図書館・ベストセラー)」「Yahoo! ブログ・Yahoo! 知恵袋」「雑誌」「新聞」は個別に抽出し、考察した。

表1 各レジスターのサンプル抽出年代(小椋 2004)

レジスター	年代
出版・新聞	2001 - 2005 年
出版・雑誌	2001 - 2005 年
出版・書籍	2001 - 2005 年

¹⁹ 朝日新聞の初出は1956年。「アメリカの男女大学生にとって「デイト」つまり異性との交際が結婚のための大事な習慣になっている」(朝日新聞 1956年1月12日)

図書館・書籍	1986 - 2005 年
ベストセラー	1976 - 2005 年
Yahoo! 知恵袋	2004 年 10 月 - 2005 年 10 月
Yahoo! ブログ	2008 年 4 月 - 2009 年 4 月

6.2.2 調査対象語

本調査の対象としたのは、以下の 1) ～3) に基づいて選定した 7 語である。

- 1) 長音が含まれている語⇒「レディー」「キャリアー」「ファースト」
- 2) 原音に二重母音がある語 ⇒「ボール」「メード」
- 3) 原音に[wi]が含まれている語 ⇒「ウィーク」「スウィート」

表 2 調査対象語一覧

	英語表記	発音記号	辞書での表記	辞書に掲載されている意味
1)	lady	[leɪdi]	レディー	①貴婦人。淑女。②婦人。女性。 「ーファースト」
	carrier	[kæriə]	キャリアー	①運搬する者。また運搬する人。②保菌者。
	fast	[fæst]	ファースト	ファーストフード <fast food> ハンバーガーやフライドチキンなど注文するとすぐにできあがる手軽な食品。
2)	bowl	[boʊl]	ボール	調理などに用いられる口の広い深鉢。ボウル。「サラダー」
	made	[meɪd]	メード	オーダーメード<order made> 注文によって作ること。また、その製品。 ⇔レディーメード
3)	week	[wi:k]	ウィーク	週。週間。「バードー」
	sweet	[swi:t]	スウィート	①甘いさま。②甘美で快いさま。 「ーコーン」「ースポット」「ーバジル」

6.3 外来語表記の基準と慣用

平成 3 年に内閣告示により『外来語の表記』が公表され、法令や公用文、報道など一般の社会生活において日本語として認められる外来語表記の基準が示されるようになった。

『外来語の表記』は、第 1 表の「一般的に外来語や外国の地名・人名を書き表すのに用いる仮名」と第 2 表の「原音や原つづりになるべく近く書き表す場合に用いる仮名」に分けられている。しながら、あくまでも基準であり「特別な音の書き表し方については、ここ

では取り決めを行わず、自由とする」としているため、NHKや新聞各社、出版社によっても表記の基本方針は異なる。

さらに講談社校閲局（2013）では『外来語の表記』を「読みやすい表記、平易な表記といった観点からすると使いにくい」とし、「外来語の場合はいろいろなケースがあり、一般の慣用も動いているので、運用にあたっては柔軟に対応したい」と述べている。

また、テクニカルコミュニケーター協会（2008）で示したガイドラインでは、同じメーカーであっても、家電とコンピューター関連の製品で表記が異なるケースや、カタログとマニュアルで表記が異なるケースも発生しているといい、外来語の使用が増えた現代において、表記のゆれは、新たな問題となっていることがわかる。

表 3 内閣告示「外来語の表記」

第1表							
ア	イ	ウ	エ	オ			
カ	キ	ク	ケ	コ	キャ	キュ	キョ
ガ	ギ	グ	ゲ	ゴ	ギャ	ギュ	ギョ
サ	シ	ス	セ	ソ	シャ	シュ	ショ
ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ジャ	ジュ	ジョ
タ	チ	ツ	テ	ト	チャ	チュ	チョ
ダ			デ	ド	ツァ	ツェ	ツォ
					ティ	デュ	
					ディ		
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ニャ	ニユ	ニョ
ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	ヒャ	ヒュ	ヒョ
バ	ビ	ブ	ベ	ボ	ビャ	ビュ	ビョ
パ	ピ	プ	ペ	ポ	ピャ	ピュ	ピョ
					ファ	フィ	フェ
マ	ミ	ム	メ	モ	ミャ	ミユ	ミョ
ヤ	ユ	ヨ					
ラ	リ	ル	レ	ロ	リャ	リュ	リョ
ワ							
ン	ッ	ー					

第2表				
		イエ		
	ウイ	ウエ	ウオ	
クア	クイ	クエ	クオ	
	ツイ			
		トウ		
	グア			
		ドゥ		
ブア	ブイ	ブ	ブエ	ブオ
		テュ		
		フュ		
		ブュ		

6.4. 長音が含まれている語の場合

『外来語の表記』では、語末の長音に関して「英語の語末・er,・or,・ar などにあたるものは、原則としてア列の長音として長音符号「ー」を用いて書き表す。ただし、慣用に応じて「ー」を省くことができる。」と述べている。この原則と慣用に関しては、小椋（2013）の調査では、「モニター」「ユーザー」「ドライバー」では9割以上、「サポーター」「カウンター」「マネージャー」「ファイバー」「コーディネーター」では8割以上が長音ありの表記となっており、「ブラウザ」「ヘア」など慣用にあたる表記は見られるものの、それはわずかであるとしている。

また、英語の語末が・dy, ・gy, ・ry, ・ty の語をどのように表記するかについて『外来語の表記』では明言されていないが、小椋は、一般の国語辞典等では、イ段長音として語末に長

音符号を用いて書き表されているものの、ウェブ上の書き込みや書籍、雑誌には語末長音が入らない語が多く出現していると述べている。

では、「レディー」「キャリアー」を例に、年代や媒体等による差異があるかを詳しく見ていきたい。

6.4.1 「lady」にみられる表記のゆれ

80年代から2008年までを見てみると、長音が入らない「レディ」が全体の72.5%で優勢である。しかしながら、「セールスレディー」のように前節する名詞によって女性の職業や地位を表す合成語となる場合を個別に見てみると、2000年代では「レディー」が42%、「レディ」が58%となり、その割合に変化が見られた。「グラマラスな」「エレガントな」「すてきな」といった形容動詞が前接する語を見てみると12例中9例(75%)は「レディ」と呼応することからも、この差が有意であることを示している。一方で、「レディ・マクベス」のように後ろに人名が接続し敬称をあらわす場合には、「レディ」が87.8%となり、全体的な傾向よりさらに長音不添加の割合が増えるため、前後に接続する語の性質により表記が異なるということが言えるであろう。

また、2000年代の出現数から媒体別に「レディ」の割合を見てみると、「書籍・雑誌」では81.1%「ブログ・知恵袋」では50.3%という結果であった。

以上のことから、全体的には、長音不添加の「レディ」が7割を超え優勢であるが、表記に決まりが設けられておらず、自由度の高い「ブログ・知恵袋」の場合は5割まで下がるということがわかり、前後に接続する語だけでなく媒体によっても差があることがわかった。

表4 「レディー／レディ」における年代・媒体別の使用傾向

	レディー	レディ		レディ	レディー
			セールス () ²⁰	58.0	42.0
1980年代	4	7	()+人名	87.8	12.2
1990年代	9	53	書籍・雑誌	81.1	18.9
2000年～2008	71	162	知恵袋・ブログ	50.3	49.7

6.4.2 「carrier」にみられる表記のゆれ

いずれの年代においても長音が入る「キャリアー」は全体の10%前後に推移しており、大きな変化は見られない。また、辞書に掲載された運搬するものや人、保菌者以外にも、

²⁰ 「セールス」の他に、女性の職業や地位を示す表現として、「テレフォン」「ファースト」「キャンペーン」「オフィス」「ヤクルト」「フロア」「生保」「営業」「観光」「証券」などがあつた。

携帯電話サービスを提供している通信事業者、航空会社、海運会社を指す場合や応用化学の分野で電導電子等を指す場合があるため、以下の3つに分類した。

1. 保菌者 「私もB型肝炎キャリアです。6ヶ月の娘がおりますが」(2006・知恵袋)
2. 通信・航空会社 「航空キャリアによる沖縄キャンペーンも功を奏し」(2002・書籍)
3. 運ぶもの 「ベビー・キャリアーをバスルームに置きドアを閉めた」(2000・書籍)

意味別の分類では大きな差異は見られなかったが、特筆すべき点は、携帯電話やインターネットの普及に伴い、通信事業者を意味する「キャリア」が急激に増加していることだ。経歴や職歴を意味する“career”も「キャリア」と表記されることから、意味用法の増加によって、今後同音異義語を弁別するために表記に変化が起こる可能性も考えられる。

表5 「キャリア／キャリアー」における年代・意味別の使用傾向

			キャリア			キャリアー				
	キャリア	キャリアー	80	90	20	80	90	20		
1980 年代	12	1	保菌者	5	10	19	—	—	2	
1990 年代	12	1		通信・航空会社	3	—	65	—	—	4
2000 年～2008	119	12		運ぶもの	2	1	25	1	1	2

6.4.3 「fast」にみられる表記のゆれ

「速い、敏速な」を意味する英語の fast は、80年代、90年代ともに「ファーストフード」という用語でのみ出現している。「ファーストフード」は、1969年に100%外資の飲食業が認可されたのを皮切りにマクドナルドやケンタッキーフライドチキンが相次いで上陸したことから広まったことばであるとされている。

宮本(2003)の調査では新聞・雑誌42誌では90%以上が長音が入らない「ファストフード」を使用している一方で、NHKが行った全国調査では70%以上の調査対象者が長音が入った「ファーストフード」を使用していると述べている。本調査でも2000年代では、全体の70%が「ファースト」となっており、NHK全国調査を支持する結果となった。また、宮本は、新語「スローフード」や他分野のことばとの対比からも今後の表記の変化に少なからず影響を受ける可能性を示唆している。

本調査でも2000年代から「ブログ・知恵袋」で出現し始めた「ファスト・パス」という語に注目した。この語は、2000年より東京ディズニーランドで導入された「ディズニー・ファストパス」のことで、少ない待ち時間でアトラクションを利用するための優先券であるが、この「ファスト・パス」の普及により2000年に入ってから「ファスト」「ファースト」の構図に変化が見られ始めたと考えられる。表6からもわかるように、2005年と2008

年を比較すると、**first food**＝「ファースト・フード」、**fast pass**＝「ファスト・パス」で定着しているようである。さらに、BCCWJ では 2008 年以降のデータは扱っていないが、「ファスト・ファッション」という語が 2009 年頃から定着してきており²¹、**fast**＝「ファスト」、**first**＝「ファースト」という書き分けがより明確になることが予想される。

表 6 「ファスト／ファースト」における年代・後続語別の使用傾向

	ファスト	ファースト		2005	2008
			ファスト・パス	16	14
1980 年代	—	1	ファースト・パス	1	1
1990 年代	28	35	ファスト・フード	7	3
2000 年～2008	128	200	ファースト・フード	39	36

6.5 原音に二重母音がある語の場合

二重母音の表記は、出版社や新聞社ごとに異なり、講談社校閲局（2013）では以下のよう

に述べている。

原音における「エイ」「オウ」は、それを含む語が外来語として取り入れられるとき調音のように発音されやすく、表記も「エー」「オー」と書く例が数多くみられます。そのため昭和 29 年の国語審議会の報告には『原音における「エイ」「オウ」は長音とみなす』という記述があったほどです。しかし、英語教育を受けた人が多数を占めるようになった現在では、「エイ」「オウ」の音が必ずしも長音化せず、そのまま外来語として取り入れられる傾向が見られます。この答申で上記の「長音とみなす」という記述がなくなったのも、このことと無関係ではないでしょう。そのため、エッセイとエッセー、メインとメーン、メイクとメーク、など語形にゆれのある語やエイズ、ノウハウ、ペイ、レイプなど長音化しない語が増えています。

6.5.1 「bowl」にみられる表記のゆれ

調理などに用いられる口の広い深鉢を指すこの語は、7 割以上レシピや調理に関する記述で使用されており、どの年代においても「ボウル」の表記が優勢である。媒体別に見ても、いずれも「ボウル」の表記で 7 割から 8 割と安定している。“球、まり”を意味する“ball”の表記で「ボウル」だった例が出現数 3,964 例中 3 例のみであり、**ball**＝「ボール」が定着

²¹ 【ファスト・ファッション】(fast fashion) ファストフードのように、流行を素早く取り入れ、おしゃれなものを安く提供するブランド、その商品。ユニクロ、GAP、H&M など。(現代用語の基礎知識 2009)

していることから、同音衝突をさけるために ball=「ボール」 bowl=「ボウル」という弁別が明確になっているのではないと思われる。

表7 「ボウル／ボール」における年代・媒体別の使用傾向

	ボウル	ボール		ボウル	ボール
1980年代	12	4	書籍	81.6	18.3
1990年代	90	63	雑誌	73.6	26.4
2000年～2008	497	250	ブログ・知恵袋	70.2	29.8

6.5.2 「made」にみられる表記のゆれ

いずれの年代でも「メイド」が優勢であり、媒体ごとの差異や前後に接続する語の違いによる差もほとんど見られなかった。同音で“お手伝いさん”を意味する“maid”も同じく「メイド」の表記が圧倒的に優勢であり、ball=「ボール」と bowl=「ボウル」のような書き分けが見られない。その理由として以下の用例(1)～(4)のように、「ボール／ボウル」は文脈によってはそれが“ball”であるのか“bowl”であるのかが判断できない例があるが、「メイド」の場合は、“made”を意味する場合、ほとんどが合成語で使用されているという性質上、同音による混同の余地がないためではないかと考えられる。

- (1) 100円で3つくらい入っているボールなどはばらして (知恵袋 2005)
- (2) お互い「これ、どっちのボール？」っていうのがなかったからよかった。(ブログ 2008)
- (3) 「パン」は、ホーム・メイド、焼きたて等を売り物にした (白書 1987)
- (4) そういうところではハウス・メイドも英語が話せたり (書籍 1989)

表8 「メイド／メード」における年代・前接語別の使用傾向

	メイド	メード		メイド	メード
			レディー ()	32	1
1980年代	17	11	オーダー ()	84	17
1990年代	26	3	ホーム ()	14	2
2000年～2008	235	39	テラー ()	17	7

6.6 原音に[wɪ]が含まれている場合

上代から平安時代にかけて、ワ行のヰ[wɪ]、ヱ[we]、ヲ[wo]はそれぞれ別の音として存在していたが、その後、ヰ・ヱ・ヲの別が失われて直音化し、日本語の音韻から消失した (和田・金田 2011)。そして現在、一度は日本語から消失した音が外来語の普及に伴って

復活しつつある。第 1348 回放送用語委員会（平成 23 年 10 月 14 日）では委員の井上史雄氏が「全国民が〔ウィ・ウェ・ウォ〕を使いこなすようになるまではもう少し時間がかかる。私たちは、この音が復活するプロセスを見ているということになる。」と述べている。

NHK 放送文化研究所発行の『放送研究と調査』でも 2006 年から 2012 年までに計 5 回にわたり、放送用語委員らと意見交換を行っており、これによると、「ウィ・ウェ・ウォ」といったワ行音の広がりや表記の面から広まり、しだいに話しことばにも普及し始めていることがわかる（下線は筆者による）。

表 9 放送用語委員会による〔ウィ・ウェ・ウォ〕に関する意見交換

2006 年 2 月	外来語のカタカナ表記について、NHK としての表記基準と社会一般の運用との違いが出てきている。 <u>日本新聞協会では『新聞用語集』の改訂にあたり、「web」のカタカナ表記を「ウェブ」から「ウエブ」に改めることを決定。</u> 原音が w で始まる外来音「wi/we/wo」などについて、今まで、許容してきた範囲をさらに広げるべきかを審議。
2006 年 7 月	NHK 放送文化研究所用語班にて外来語の調査を実施。その結果、連母音「ウイ/ウエ/ウォ」の表記と「ウィ/ウェ/ウォ」の表記を使い始めている様子はわかるが、圧倒的に多いと言えないことが明らかになった。 <u>表音一致から離れているものが多くなり、原則の見直しも審議する必要性がある。</u>
2006 年 10 月	『新聞用語集』の改訂を受け、 <u>NHK でもマスメディアで使用されている表記との一致をはかるため、「WEB」のカタカナ表記を「ウエブ」とすることを承認。</u>
2012 年 2 月	Yahoo 検索で抽出した表記と『話し言葉コーパス』に出現した発音を比較した調査の結果、 <u>話しことばでは連母音（ウイ・ウエ・ウォ）が多くウェブ上の表記では新ワ行音が多いことが明らかになった。</u> 「表記するときはかっこいい表記を選ぶ意識があり「新ワ行音」を使うが、話す時には自分が話しやすいように発音するということだろう。」（井上史雄委員）
2012 年 6 月	外来語の表記と発音に関しては、原音でどう発音されているかではなく、実際に日本人がどう発音しているかといったことを重視して検討する。 「慣用が一般的になっているかどうかは一語一語検討していかないとわからない。原則を決めても、社会の中で使われる用法がどんどん変わってしまう。」（荻野綱男委員）

6.6.1 「week」にみられる表記のゆれ

80 年代から新ワ行音「ウィーク」が全体の 7～8 割前後で定着している。しかしながら

2000年代の用例をジャンル別に「書籍」「雑誌」「新聞」「ブログ・知恵袋」で分類したところ、新聞では「ウィーク」2例に対し、「ウイーク」8例、雑誌では「ウィーク」19例に対し「ウイーク」14例であり、出現数はわずかであるが、全体的な傾向とは異なる結果となった。これは新聞社や出版社で『外来語の表記』の第1表に示されている「ウイーク」を基準としているためであると考えられる。そして書籍やウェブ上の書き込みのように表記の自由度が高いような場合、「書籍」では「ウィーク」40例に対し「ウイーク」7例、「ブログ・知恵袋」では「ウィーク」132例に対し「ウイーク」43例と、「ウィーク」が圧倒的に優勢であることがわかった。2006年にNHK放送用語委員会や日本新聞協会が「ウェブ」から「ウェブ」へ表記の原則を変更しているが、このような許容範囲の拡大は今後さらに広がることが予想される結果となった。

表10 「ウィーク／ウイーク」における年代・媒体別の使用傾向

	ウィーク	ウイーク		ウィーク	ウイーク
			書籍	40	7
1980年代	10	3	雑誌	19	14
1990年代	30	8	新聞	2	8
2000年～2008	251	79	ブログ・知恵袋	132	43

6.6.2 「sweet」にみられる表記のゆれ

一方で、「スイート」の表記は、80年代から年代ごとに85%→67%→77%と推移しており、概ね「スイート」で安定していると言える。先に述べたNHK放送文化研究所によるYahoo!検索を使った調査では「ウィ」表記する割合が「ウィザード」(92%)→「ウィーク」(90%)→「ウィンドウズ」(75%)→「ウィンドーショッピング」(51%)→「ウィルス」(37%)→「スイッチ」(1%)→「スウィミング」(0%)であったと示している。このように、[wi]は語によって「ウィ」であるか「ウイ」であるかに大きな差が出るようだ。

次に「スイート」の用例を細かく見てみると、「スイートピー」「スイートポテト」「スイートコーン」のように合成語として使用されている例が多いことがわかった。

表11 「スイート／スウィート」における後続語別の使用傾向

	スイート	スウィート		スイート	スウィート
			ポテト	36	0
1980年代	6	1	コーン	25	0
1990年代	20	9	バジル	7	1
2000年～2008	182	52	チリソース	9	1

そこで、以下の用例のように形容動詞用法で使用される例だけを抽出し、その用例を「スイート」「スウィート」の別にジャンルごとに分類した。

- ・ スイートで、でもあっさりした香り。どこにでも嫌味なくつけていけます(知恵袋・2005)
- ・ スイートなコーディネートも白を合わせれば、上品にまとまります。(雑誌・2005)
- ・ ワン・アンド・オンリーでスウィートな世界はそのままに (雑誌・2001)
- ・ スウィートでパウダリーな感じがする (書籍・2002)

その結果、「ブログ・知恵袋」では「スウィート」の方が多かったことから、媒体だけでなく品詞によっても表記の傾向が異なることがわかった。また媒体ごとの出現数全体に占める形容動詞用法の割合は「雑誌」で 26.8% (106 例中 39 例)、「書籍」で 3.1% (182 例中 6 例)、「ブログ・知恵袋」で 5% (94 例中 5 例) となっており、「雑誌」では他の媒体に比べ、圧倒的に形容動詞用法で使用される割合が多く、さらに 94%以上は女性誌での出現であった。ただ、表記は「スイート」が圧倒的に多いのは予想外の結果であった。講談社校閲局 (2013) では「しやれた感じを出したいときなどには「ウィ」「ウェ」「ウオ」と書くこともあります」と述べているため、「雑誌」での形容動詞的用法は今後「スウィート」が増えていくのではないかと考えられる。

表 12 「スイート／スウィート」の形容動詞的用法における媒体別の使用傾向

	スイート	スウィート
書籍 (6 例/182)	3	3
雑誌 (39 例/106)	33	6
ブログ・知恵袋 (5 例/94)	1	4

6.7 まとめ

本調査では、表記にゆれがある外来語を、BCCWJ を用いて分析し、経年変化や媒体ごとの差異を見てきた。その結果以下の 3 点について明らかになった。

- ① 表記の自由度が高い「ブログ・知恵袋」のようなウェブ上の書き込みでは、「ウィーク」のように慣用とされている表記も、全体的な割合よりも増えることがわかった。
- ② 1960 年代後半から使われ始めた「ファースト・フード」と 2000 年代初頭から使われ始めた「ファスト・パス」からわかるように、影響力の強い商品・商標によってその後の表記に変化が見えた。

- ③ 合成語として名詞に前節する「スイート」と形容動詞的用法で使われる「スイートな」のように品詞が異なることで表記の傾向が異なる場合があることがわかった。

以上のように、外来語表記のゆれには、これまで言及されてきた経年変化や年代差だけでなく、媒体による差や品詞による差も影響を及ぼすことがわかった。

今後、外来語の広がりにともない、原語では意味を弁別する別々の語が日本語に入り、借用語適応によってひとつの音韻になり、同音衝突することが増えると予想される。そういった際に長音の有無や「エイ」「エー」のような書き分けがそれらを弁別する機能を持てば、今回の調査で明らかになった表記のゆれの要因が日本語教育に生かせるのではないかと考えられる。今後は、BCCWJ で取り扱っていない 2009 年以降に増えた語なども含め、さらに考察を深めることを課題としたい。

第7章 結論と今後の課題

本研究では、日本語教育における外来語指導に有効な指導方法と示すことを目的として、3つの調査から考察と分析を行った。

第4章では国語辞典に掲載されている外来語2347語の借用語適応を音節ごとに分析し、単音節語では、開音節化、音素の置き換え、弛緩母音+阻害音は促音を挿入するという通常の借用語適応規則で95%以上が正常に処理できることを明らかにした。

また、二音節までの語では、語末の子音が [ks]や[kl]であれば促音化し、[pt][kt][kst][dl]では促音化しないという規則が明確に存在することもわかった。

そして借用語適応の例外も以下のように類型化することが有用であることを述べた。

- ① 3モーラ音節忌避のための母音消失「チェンジ」「アレンジ」「コンテナー」
- ② 添加母音の通時的変化「ブラシ」「タキシード」「テキスタイル」
- ③ 重子音による撥音添加「インナー」「カンニング」「ランニング」
- ④ 強勢のない語末の age「イメージ」「メッセージ」「アドバンテージ」

以上の結果から、借用語適応を一貫した規則のもとで習得することは不可能であるが、音節ごとの特徴や例外にも規則性があることに注目し、外来語を十把一絡げに取り扱うのではなく、導入方法や指導方法を分けて考える必要性を主張する。

第5章では、インドネシア人学習者を対象に外来語の書き取り調査を行った。この調査では1.借用語適応による音韻変化が少ない語、2.オランダ語の影響を受けている語、3.インドネシア語の音韻体系の影響を受けている語、4.日本語とインドネシア語で対応する音韻が異なる語という4つのカテゴリーで誤表記から見られる外来語指導の留意点を考察した。非英語母語話者であるインドネシア人学習者の外来語習得では、英語からインドネシア語への借用語適応において起こる音韻変化や表記体系の影響も考慮すべきであることがわかった。

第6章では、BCCWJを用いて、外来語表記のゆれの要因を調査した。その結果、表記の自由度が高いウェブ上での表記は、「外来語の表記」で慣用とされている「ウィーク」のような表記が、全体的な割合よりも増えることがわかった。

また「ファスト・パス」という新語の出現に見られるように、影響力の強い商品・商標によってその後の表記傾向に変化が生じる可能性を示唆した。「スウィート」か「スイート」というゆれに関しては、用法の違いが表記の差として表れる傾向を示した。

今後の課題としては、第5章で行った非母語話者を対象とした外来語の書き取り調査を、同一の語彙をもとに音韻体系の異なるさまざまな言語を母語とする学習者を対象に行うことである。それによってはじめて、母語ごとの特徴や母語が異なる学習者にも共通して見られる誤りが見えてくると考えられるからだ。

また、本研究では、学習者の習得レベル別の考察を行っていないが、初級～超級に至るまでに学習者自身が借用語適応規則をどのように形成していくかを観察する必要があると

考えらえる。上級や超級に至った学習者には、表記のゆれに媒体による違いや用法による傾向が見られることを提示することでより正確な日本語を身に付けたいという学習者の要望に応えることができるのではないかと考えている。

謝辞

本論文執筆にあたって多くの方々にお世話になりました。

指導教官のダニエル・ロング先生には、懇切な指導と的確な助言をいただきました。知識不足と展望の甘さから研究が思い通りに進まないことが何度もありましたが、インドネシアでの調査やシドニーで発表の機会を与えてくださったことで奮起することができました。心から感謝申し上げます。

第6章のBCCWJによる外来語表記のゆれに関する研究は、長谷川守寿先生の授業で行った調査を基礎としています。長谷川先生からはコーパス調査における検証方法や分析に関して多くの貴重な助言をいただきました。

また、博士後期課程の李舜炯さんには、学内外で本当にお世話になりました。李さんの存在は間違いなく私の院生生活を彩りあるものに変えてくれました。ずいぶん生意気なことを言って困らせたとありますが、全ては愛情の裏返しです。

博士後期課程の趙麗文さんをはじめ、ロングゼミの諸先輩方（李さん、沼里さん、張鋭さん）には、年末に本場仕込みの火鍋を作ってください励ましてもらいました。廊下にまで充満した匂いとともによさしい心遣いは決して忘れません。

参考文献一覧

- 茜八重子 (1998) 「日本語学習者に見られる外来語表記の誤りについて - 開音節化の規則体系がどのように片仮名表記に現れるか - 」『講座日本語教育』第 34 号
- 石綿敏雄 (2001) 『外来語の総合的研究』東京堂出版
- 井上史雄 (2002) 「西洋語の発音の影響」飛田良文・佐藤武義編『現代日本語講座 第 3 巻 発音』明治書院
- 榎垣実 (1963) 『日本外来語の研究』研究社
- 大江三郎 (1969) 「日本語中の外来語における母音呼応」『文学研究』66 号 九州大学
- 大曾美恵子 (1991) 「英語の音形の日本語化」『日本語教育』74 号 日本語教育学会
- 大滝靖司 (2013) 「日本語借用語における 2 種類の促音化」『国立国語研究所論集』6
- 小椋秀樹 (2013) 「大規模コーパスを活用した外来語表記のゆれの調査」『立命館文学』630 号
- 小椋秀樹 (2014) 「コーパス活用の勘所第 8 回【現代語】表記 (1)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』による表記の研究」『日本語学』11 月号 明治書院
- 小野浩司 (1991) 『外来語としての英語の促音化について』『言語研究』100 号
- 亀井孝・千野栄一・河野六郎 (編) (1995) 『言語学大辞典』三省堂
- 川越いつえ (1995) 「借用語にみる促音化とリズム衝突」『言語研究』108 号
- 川越いつえ・荒井雅子 (2002) 「借用語における促音」『音声研究』第 6 巻第 1 号
- 北原真冬 (1997) 「音韻論と文法-借用語の促音とアクセントの分析を通じて-」音声文法研究会編『文法と音声』くろしお出版
- 木本壽美恵 (2003) 「タイ人日本語学習者のカタカナ外来語表記の傾向について」『日本語教育論集』第 12 号 姫路独協大学大学院
- 金城ふみ子 (2004) 「学部留学生の片仮名語彙に関する学習状況と意識の変化についての考察 CAI を活用した片仮名語彙学習」『東京国際大学論叢 経済学部編』30 号
- 窪菌晴夫 (1999) 『日本語の音声』岩波書店
- 顧冰馨 (2012) 「外来語に見られる開音節化規則の習得 -中国語母語話者への調査について-」『言語教育研究』2 号 桜美林大学
- 講談社校閲局編 (2013) 『日本語の正しい表記と用語の辞典 第 3 版』講談社
- 国際音声学会編 (2003) 『国際音声記号ガイドブック』大修館書店
- 国立国語研究所編 カッケンブッシュ寛子・大曾美恵子著 (1990) 『外来語の形成とその教育日本語教育指導参考書 16』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所編 (2006) 『外来語と現代社会』国立国語研究所
- 小林ミナ・カッケンブッシュ寛子・深田淳 (1991) 「外来語にみられる日本語化規則の習得-英語話者の調査に基づいて-」『日本語教育』74 号 日本語教育学会

- 小林泰秀（2000）「英語借用語の発音」『広島女学院大学英語英米文学研究』第9号
- 斎藤純男（2007）『日本語音声学入門 改訂版』三省堂
- 佐々木仁子・松本紀子（2010）『「日本語能力検定試験」対策日本語総まとめ N3 語彙』アスク出版
- 澤田田津子（1985）「外来語における母音添加について」『国語学』143集 国語学会
- 陣内正敬（2008）「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』第11号 関西学院大学
- スリーエーネットワーク編著『みんなの日本語 初級Ⅰ・Ⅱ第2版 本冊』スリーエーネットワーク
- 竹内真生子（2014）『日本人のための英語発音完全教本』アスク出版
- 竹林滋・渡邊未耶子・清水あつ子・斉藤弘子（1991）『初級英語音声学』大修館書店
- 竹林滋（1996）『英語音声学』研究社
- 田中伊式（2006）「外来語の発音とカタカナ表記（2）～「wi/we/wo」などを中心に～」『放送研究と調査』5月号 NHK 出版
- 谷口五郎（1974）『新インドネシア語入門』鹿島研究所出版会
- 築島裕（1966）『国語学』財団法人東京大学出版会
- 鄭恵卿（1995）「韓国人の日本語学習における外来語表記の問題点一日・韓両言語の音韻対照による分析」『日本語教育』87号 日本語教育学会
- テクニカルコミュニケーター協会（2008）『外来語（カタカナ）表記ガイドライン第2版』
- 東京外国語大学 留学生日本語教育センター編（2010）『初級日本語 新装改訂版 上・下』凡人社
- 中右実編 窪菌晴夫・太田聡著（1998）『音韻構造とアクセント』研究社
- 中條修（1995）『日本語の音韻とアクセント』勁草書房
- 中山恵利子（2012）「日本語学習者の外来語意識-日本語教育における外来語教育を考える-」陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫『外来語研究の新展開』おうふう
- 成田圭市（2009）『英語の綴りと発音「混沌」へのアプローチ Handbook of English Spelling』三恵社
- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子（2011）『初級日本語げんき 第2版』ジャパントイムズ
- 降旗正志（2005）『インドネシア語のしくみ』白水社
- 丸田孝治（2001）「英語借用語における促音化：原語音節構造の保持と母語化」『音韻研究』4号 開拓社
- 三宅良美（2012）「インドネシアの英語と英語借用語」『インドネシア言語と文化』18
- 宮島達夫・高木翠（1974）「外来語の表記の変化とゆれ」『計量国語学』71号
- 宮本克美（2003）「ファーストフードに食われるファーストフード 平成14年度「ことば

- のゆれ」全国調査から (1)』『放送研究と調査』5月号 NHK 出版
- 山下洋子 (2006) 「外来語の発音とカタカナ表記～調査報告から～」『放送研究と調査』9月号
- (2006) 「カタカナ表記について～ウェブ/ウエブの表記を検討」『放送研究と調査』12月号
- (2011) 「外来語の表記と発音について」『放送研究と調査』12月号
- (2012) 「外来語の表記・発音について「ウイ・ウエ・ウオ」か「ウィ・ウェ・ウォ」か」『放送研究と調査』4月号
- (2012) 「外来語の発音・表記について～[wi][we][wo]と二重母音[ei]～」『放送研究と調査』12月号
- 米川明彦 (1987) 「近代の衣服の外来語」『梅花女子大学文学部紀要』22号
- 読売新聞社編 (2008) 『改訂新版読売新聞用字用語の手引』中央公論新社
- 和田利政・金田弘 (2011) 『国語要説 五訂版』大日本図書
- NHK 放送文化研究所 (2003) 『NHK ことばのハンドブック』日本放送出版協会
- Wells, J.C. (1982) *Accents of English I An Introduction*. Cambridge University Press
- Badudu, Jusuf Sjarif (2003) *Kamus Kata-Kata Serapan Asing Dalam Bahasa Indonesia*. Kompas

参考辞書

- 「現代用語の基礎知識」編集部 (2014) 『現代用語の基礎知識』自由国民社
- 末永晃 (2001) 『日本語インドネシア語大辞典』大学書林
- 末永晃 (2002) 『インドネシア語辞典』大学書林
- 森岡健二・徳川宗賢 (2012) 『集英社国語辞典』集英社
- Longman Dictionary of Contemporary English 5th edition (2009) Pearson Education Limited.
- Cambridge Dictionary of American English 2nd edition (2012) Cambridge University Press.

参考サイト

- 「外来語に関する意識調査Ⅱ」
www.nijal.ac.jp/archives/genzai/ishiki/16index.html.
 (最終アクセス 2015年1月12日)

「日本語教育への応用に向けた借用語適応過程に関する研究」

第4章 日本語に取り入れられた英語における借用語適応

調査対象語彙一覧

日本語カタカナ表記	つづり	音声記号	備考
アーカイブ	archive	[ɑ:kɑ:v]	〈英〉[ɑ:kɑ:v]
アーキテクチャー	architecture	[ɑ:kətektʃə]	〈英〉[ɑ:kətektʃə]
アーケイック	archaic	[ɑ:keɪk]	〈英〉[ɑ:keɪk]
アーケード	arcade	[ɑ:keɪd]	〈英〉[ɑ:keɪd]
アーケオロジー	archaeology	[ɑ:kɪələdʒi]	〈英〉[ɑ:kɪələdʒi]
アーチ	arch	[ɑ:tʃ]	〈英〉[ɑ:tʃ]
アーチェリー	archery	[ɑ:tʃəri]	〈英〉[ɑ:tʃəri]
アーティスティック	artistic	[ɑ:tɪstɪk]	〈英〉[ɑ:tɪstɪk]
アーティチョーク	artichoke	[ɑ:tətʃouk]	〈英〉[ɑ:tətʃouk]
アーティフィシャル	artificial	[ɑ:təfɪʃəl]	〈英〉[ɑ:təfɪʃəl]
アート	art	[ɑ:t]	〈英〉[ɑ:t]
アーバン	urban	[ɜ:bən]	〈英〉[ɜ:bən]
アーミー	army	[ɑ:mi]	〈英〉[ɑ:mi]
アーム	arm	[ɑ:m]	〈英〉[ɑ:m]
アーモンド	almond	[ɒmənd]	〈英〉[ɑ:mənd]
アイアン	iron	[aɪərn]	〈英〉[aɪən]
アイコン	icon	[aɪkən]	〈英〉[aɪkən]
アイス	ice	[aɪs]	
アイデア	idea	[aɪdɪə]	
アイテム	item	[aɪtəm]	
アイデンティティー	identity	[aɪdentəti]	
アイドル	idol	[aɪdəl]	〈英〉[aɪdl]
アイビー	ivy	[aɪvi]	
アイボリー	ivory	[aɪvəri]	
アイリス	iris	[aɪrəs]	
アイロニー	irony	[aɪrəni]	
アウト	out	[aʊt]	
アカウント	account	[əkaʊnt]	
アカデミー	academy	[əkædəmi]	
アクアマリン	aquamarine	[ækwəmərin]	

アクアリウム	aquarium	[ækwəriəm]	
アクエリウス	aquarius	[ækweriəs]	
アクシデント	accident	[æksədənt]	
アクション	action	[ækʃən]	
アクセサリー	accessory	[æksesəri]	<英>accessary
アクセス	access	[ækses]	
(以下中略)			
ウオッシュャブル	washable	[wəʃəbəl]	
ウォッチ	watch	[wɒtʃ]	<英> [wɒtʃ]
ウラニウム	uranium	[jʊəriəm]	
エア	air	[er]	<英> [eə]
エアロビクス	aerobics	[eroubiks]	<英> [eəroubiks]
エイト	eight	[eit]	
エイリアン	alien	[eɪliən]	
エーカー	acre	[ekər]	<英> [eɪkə]
エージェント	agent	[eidʒənt]	
エージング	aging	[eidʒɪŋ]	
エース	ace	[eis]	
エール	yell	[jel]	
エキサイト	excite	[ɪksaɪt]	[eksaɪt]
エキシビション	exhibition	[eksəbɪʃən]	
エキストラ	extra	[ekstrə]	
エキスパート	expert	[ekspɜ:t]	
エキセントリック	eccentric	[ɪksentɹɪk]	[eksentɹɪk]
エキゾチック	exotic	[ɪgzətɪk]	[egzətɪk]
エクササイズ	exercise	[eksəsaɪz]	
エクスタシー	ecstasy	[ekstəsi]	
エクスチェンジ	exchange	[ɪkstʃeɪndʒ]	[ekstʃeɪndʒ]
エクステリア	exterior	[ekstɪəri:ər]	[ekstɪəri:ə]
エクスプレス	express	[ɪkspres]	[ekspres]
エクスペリメント	experiment	[ɪksperəmənt]	[eksperəmənt]
エクスペンシブ	expensive	[ɪkspensɪv]	[ekspensɪv]
エクスポート	export	[eksɜ:pɔ:t]	
エグゼクティブ	executive	[ɪgzekjətɪv]	[egzekjətɪv]

エクセレント	excellent	[eksələnt]	
エクソシスト	exorcist	[eksɔsəst]	
エコー	echo	[ekou]	
(以下中略)			
コマーシャル	commercial	[kəmərʃəl]	
コミッション	commission	[kəmɪʃən]	
コメディ	comedy	[kəmədi]	
ゴリラ	gorilla	[gərɪlə]	
コレクション	collection	[kəlekʃən]	
コロニー	colony	[kələni]	
コンサルタント	consultant	[kənsəltənt]	
コンシューマー	consumer	[kənsu:mər]	
コンストラクション	construction	[kənstrʌkʃən]	
コンセンサス	consensus	[kənsensəs]	
コンディション	condition	[kəndɪʃən]	
コンテナ	container	[kəntemər]	
コンドーム	condom	[kəndəm]	
ゴンドラ	gondola	[gəndələ]	
コンパートメント	compartment	[kəmpartmənt]	
カンパニー	company	[kʌmpəni]	→カンパニー
コンパニオン	companion	[kəmpənjən]	
コンビニエンス	convenience	[kənvi:njəns]	
コンピューター	computer	[kəmpju:tər]	
コンフィデンシャル	confidential	[kənʃədentʃəl]	
コンプライアンス	compliance	[kəmplaɪəns]	
コンベヤー	conveyer	[kənveɪər]	→コンベア
コンベンション	convention	[kənventʃən]	〈英〉 [kənvenʃən]
コンポーネント	component	[kəmpəʊnənt]	
(以下、中略)			
シェード	shade	[ʃeɪd]	
ジェット	jet	[dʒet]	
ジェネレーション	generation	[dʒenəreɪʃən]	

ジェノサイド	genocide	[dʒenəsaid]	
ジェラシー	jealousy	[dʒeləsi]	
シェリー	sherry	[ʃeri]	
シェリフ	sheriff	[ʃerəf]	
シェル	shell	[ʃel]	
ジェル	gel	[dʒel]	
シェルター	shelter	[ʃeltər]	<英>[ʃeltə]
シェルフ	shelf	[ʃelf]	
ジェンダー	gender	[dʒendər]	<英>[dʒendə]
ジェントルマン	gentleman	[dʒentəlmən]	
ジオメトリック	geometric	[dʒiəmetrɪk]	
シガレット	cigarette	[ʃigəret]	
シスター	sister	[sɪstər]	
システム	system	[sɪstəm]	
シソーラス	thesaurus	[θəsɔrəs]	<英> [θɪsɔrəs]
シナリオ	scenario	[sənəriou]	
シニア	senior	[sɪnjər]	<英> [sɪnjə]
シニカル	cynical	[sɪnɪkəl]	
シノニム	synonym	[sɪnənɪm]	
シビリアン	civilian	[səvɪljən]	<英>[sɪvɪliən]
ジフテリア	diphtheria	[dɪfθɪriə]	<英> [dɪfθəriə]
シフト	shift	[ʃɪft]	
シミュレーション	simulation	[sɪmjəleɪʃən]	
ジム	gym	[dʒɪm]	
ジャー	jar	[dʒɑr]	<英> [dʒɑ:]
ジャーキー	jerky	[dʒɜrki]	<英>[dʒɜ:kɪ]
ジャーク	jerk	[dʒɜrk]	<英>[dʒɜ:k]
ジャージー	jersey	[dʒɜrzi]	<英>[dʒɜ:zi]
ジャーナル	journal	[dʒɜrnəl]	<英>[dʒɜ:nəl]
ジャーニー	journey	[dʒɜrni]	<英>[dʒɜ:ni]
シャープ	sharp	[ʃɑp]	<英> [ʃɑ:p]
シャイ	shy	[ʃaɪ]	
(以下中略)			
ゼラニウム	geranium	[dʒərəniəm]	<英> [dʒɪreniəm]

セラピー	therapy	[θerəpi]	
ゼリー	jelly	[dʒeli]	
セルロース	cellulose	[seljələʊs]	
セレクト	select	[səlekt]	
セレモニー	ceremony	[serəməʊni]	
セロファン	cellophane	[seləfem]	
セロリ	celery	[seləri]	
センサー	censor	[sensər]	〈英〉[sensə]
センシティブ	sensitive	[sensətɪv]	
センス	sense	[sens]	
センセーション	sensation	[sensetʃən]	
センター	center	[sentər]	〈英〉[sentə]
センチメント	sentiment	[sentəmənt]	
センチュリー	century	[sentʃəri]	
センテンス	sentence	[sentəns]	
セントラル	central	[sentrəl]	
ソウル	soul	[soʊl]	
ソーシャル	social	[soʊʃəl]	〈英〉[soʊʃl]
ソース	sauce	[sɔs]	
ソーセージ	sausage	[sɔsɪdʒ]	〈英〉[sɔsɪdʒ]
ソート	sort	[sɔrt]	〈英〉[sɔ:t]
ソープ	soap	[soʊp]	
ソーラー	solar	[soʊlər]	〈英〉[soʊlə]
ソール	sole	[soʊl]	
ゾーン	zone	[zoʊn]	
ソックス	socks	[saks]	
ソディウム	sodium	[soʊdiəm]	
ソナー	sonar	[soʊnər]	
ソファー	sofa	[soʊfə]	
ソフト	soft	[sɔft]	〈英〉[sɔft]
ソング	song	[sɒŋ]	〈英〉[sɒŋ]
ゾンビ	zombie	[zambi]	
ターキー	turkey	[tɜrki]	〈英〉[tɜki]
ダーク	dark	[dark]	
ターゲット	target	[tɑrgət]	

ダース	dearth	[dɜrθ]	<英>[dɜθ]
ダーツ	darts	[darts]	<英> [dɑ:ts]
ダーティー	dirty	[dɜrti]	<英>[dɜ:ti]
ターバン	turban	[tɜrbən]	<英>[tɜ:bən]
ダービー	derby	[dɜrbi]	<英>[dɜ:bi]
ターフ	turf	[tɜrf]	<英>[tɜ:f]
ターム	term	[tɜrm]	<英>[tɜ:m]
ダーリン	darling	[dɑrlɪŋ]	<英>[dɑ:lɪŋ]
タール	tar	[tɑr]	<英> [tɑ:]
ターン	turn	[tɜrn]	<英>[tɜ:n]
タイ	tie	[taɪ]	
ダイアゴナル	diagonal	[daɪəɡənəl]	
ダイアル	dial	[daɪl]	<英> [daɪəl]
ダイアログ	dialogue	[daɪələɡ]	
ダイエット	diet	[daɪət]	
タイガー	tiger	[taɪɡər]	
ダイジェスト	digest	[daɪdʒest]	
ダイス	dice	[daɪs]	
タイト	tight	[taɪt]	
タイトル	title	[taɪtl]	<英>[taɪtl]
ダイナマイト	dynamite	[daɪnəmaɪt]	
ダイナミック	dynamic	[daɪnəmɪk]	
ダイバーション	diversion	[daɪvɜrʒən]	
タイプ	type	[taɪp]	
ダイブ	dive	[daɪv]	
タイミング	timing	[taɪmɪŋ]	
(以下、中略)			
ファイル	file	[faɪl]	
ファイン	fine	[faɪn]	
ファウル	fault	[faʊl]	
ファクシミリ	facsimile	[fæksɪməli]	
ファクター	factor	[fæktər]	
ファシスト	fascist	[fæʃəst]	<英> [fæʃɪst]
ファスナー	fastener	[fæsənər]	

ファッション	fashion	[fæʃən]	
ファナティック	fanatic	[fənætɪk]	
ファミリー	family	[fæməli]	
ファン	fan	[fæn]	
ファンキー	funky	[fʌŋki]	
ファンクション	function	[fʌŋkʃən]	
ファンタジー	fantasy	[fæntəzi]	
ファンデーション	foundation	[faʊndərʃən]	
ファンド	fund	[fʌnd]	
フィー	fee	[fi]	
フィート	feet	[fit]	
フィーバー	fever	[fivər]	<英> [fivə]
フィーリング	feeling	[fiɪŋ]	
フィールド	field	[fild]	
フィクション	fiction	[fɪkʃən]	
フィジックス	physics	[fɪzɪks]	
フィズ	fizz	[fɪz]	
フィッシング	fishing	[fɪʃɪŋ]	
フィット	fit	[fɪt]	
フィニッシュ	finish	[fɪnɪʃ]	
フィラメント	filament	[fɪləmənt]	
フィルター	filter	[fɪltə]	<英> [fɪltə]
フィルム	film	[fɪlm]	
フィロソフィー	philosophy	[fələsəfi]	
フィン	fin	[fɪn]	
フィンガー	finger	[fɪŋɡər]	<英> [fɪŋɡə]
ブース	booth	[buθ]	
(以下、中略)			
ボリューム	volume	[vɒljəm]	
ボルテージ	voltage	[voʊltɪdʒ]	
ボルト	volt	[voʊlt]	
ポルノグラフィー	pornography	[pɔːnəgrəfi]	<英> [pɔːnəgrəfi]
ホワイト	white	[hwaɪt]	<英> [ˈwaɪt]
マーガリン	margarine	[mɑːdʒərən]	<英> [mɑːdʒərɪn]

マーキュリー	mercury	[mɜ:kjəri]	<英> [mɜ:kjəri]
マーク	mark	[mɑ:k]	<英> [mɑ:k]
マーケット	market	[mɑ:kət]	<英> [mɑ:kət]
マージナル	marginal	[mɑ:dʒənəl]	<英> [mɑ:dʒənəl]
マージン	margin	[mɑ:dʒən]	<英> [mɑ:dʒən]
マーチ	march	[mɑ:tʃ]	<英> [mɑ:tʃ]
マーチャндаイジング	merchandising	[mɜ:tʃəndaɪzɪŋ]	<英> [mɜ:tʃəndaɪzɪŋ]
マート	mart	[mɑ:t]	<英> [mɑ:t]
マーブル	marble	[mɑ:bəl]	<英> [mɑ:bəl]
マーマレード	marmalade	[mɑ:məleɪd]	<英> [mɑ:məleɪd]
マーメイド	mermaid	[mɜ:meɪd]	<英> [mɜ:meɪd]
マイナー	miner	[maɪnə]	<英> [maɪnə]
マイナス	minus	[maɪnəs]	
マイノリティー	minority	[maɪnɔ:ɹəti]	
マイル	mile	[maɪl]	
マイルド	mild	[maɪld]	
マウス	mouth	[maʊθ]	
マウンテン	mountain	[maʊntən]	
マウンド	mound	[maʊnd]	
マガジン	magazine	[mægəzɪn]	
マグニチュード	magnitude	[mægnətud]	
マグネシウム	magnesium	[mægnɪziəm]	
マグネット	magnet	[mægnət]	
(以下、中略)			
モーター	motor	[moutər]	
モテル	motel	[moutel]	
モード	mode	[moud]	
モーニング	morning	[mɔ:nɪŋ]	
モーメント	moment	[moumənt]	
モール	mall	[mɔ:l]	
モカシン	moccasin	[makəsən]	
モダン	modern	[mɔdərn]	
モットー	motto	[matou]	
モップ	mob	[mɔb]	<英> [mɔb]

モップ	mop	[mɒp]	<英>[mɒp]
モディフィケーション	modification	[mɒdəfəkeɪʃən]	<英>[mɒdəfəkeɪʃən]
モデル	model	[mɒdəl]	<英>[mɒdl]
モナーキー	monarchy	[manərki]	<英>[mɒnəki]
モニュメント	monument	[manjəmənt]	<英>[mɒnjəmənt]
モノガミー	monogamy	[mənaɡəmi]	<英>[mɒnɒɡəmi]
モノポリー	monopoly	[mənaʊpəli]	<英>[mɒnəʊpəli]
モバイル	mobile	[məʊbaɪl]	
モペッド	moped	[məʊped]	
モラトリウム	moratorium	[məʊətɔːriəm]	<英>[mɒʊətɔːriəm]
モラル	moral	[məʊəl]	<英>[mɒrl]
(以下、中略)			
ラバー	rubber	[rʌbər]	
ラバトリー	lavatory	[ləvətɔːri]	
ラビリンス	labyrinth	[ləbərɪnθ]	
ラフ	rough	[rʌf]	
ラブ	love	[lʌv]	
ラプソディー	rhapsody	[ræpsədi]	
ラベル	label	[leɪbəl]	
ラベンダー	lavender	[ləvəndər]	
ラボラトリー	laboratory	[ləbrətɔːri]	[ləbərətɔːri]
ララバイ	lullaby	[lʌləbaɪ]	
ランク	rank	[ræŋk]	
ランゲージ	language	[læŋɡwɪdʒ]	
ランタン	lantern	[læntərn]	
ランチ	lunch	[lʌntʃ]	
ランド	land	[lænd]	
ランドリー	laundry	[laʊndri]	
ランニング	running	[rʌnɪŋ]	
ランプ	lamp	[læmp]	
リアクション	reaction	[riækʃən]	
リアル	real	[riəl]	[rɪəl]
リーク	leak	[lik]	
リーグ	league	[lig]	

リース	lease	[lis]	
リーズナブル	reasonable	[rizənəbəl]	
リーゼント	regent	[ridʒənt]	
リーダー	leader	[lidər]	<英>[lidə]
リーチ	reach	[ritʃ]	
リード	lead	[lid]	
リーフレット	leaflet	[liflæt]	
リール	reel	[ril]	
リカー	liquor	[lɪkər]	<英> [lɪkə]
リカバリー	recovery	[rɪkʌvəri]	
リクエスト	request	[rɪkwɛst]	
リクリエーション	recreation	[rekriːʃən]	
(以下、中略)			
ロマンス	romance	[rəʊmæns]	
ロング	long	[lɒŋ]	<英> [lɒŋ]
ワーク	work	[wɜrk]	<英>[wɜ:k]
ワースト	worst	[wɜrst]	<英>[wɜ:st]
ワード	word	[wɜrd]	<英>[wɜ:d]
ワープ	warp	[wɔ:rp]	<英>[wɔ:p]
ワーム	worm	[wɜrm]	<英>[wɜ:m]
ワールド	world	[wɜrld]	<英>[wɜ:ld]
ワイド	wide	[waɪd]	
ワイフ	wife	[waɪf]	
ワイプ	wipe	[waɪp]	
ワイヤ	wire	[waɪr]	<英>[waɪə]
ワイルド	wild	[waɪld]	
ワイン	wine	[waɪn]	
ワゴン	wagon	[wæɡən]	
ワックス	wax	[wæks]	
ワンダフル	wonderful	[wʌndərfəl]	

正誤表

ページ数	行目	誤	正
14	表 4	/Cər/	C+/ər/
14	表 4	/Vər/	V+/ər/
16	表 8	stake	steak
16	表 8	asbest 澤田（1985:83）による	asbestos
16	表 8	cincreet 澤田（1985:83）による	concrete
31	表 4	foctor 要素	factor 要素
付録 9		miner	minor